

早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）

大学生アスリートのキャリア移行の検討
—競技者としてのキャリアを踏まえて—

Career transition research on student-athletes:
Considering athletic career path

2024年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

並木 伸賢

NAMIKI, Nobutaka

研究指導教員： 堀野 博幸 教授

目次

第1章 本論文の背景.....	4
第1節 スポーツ心理学におけるアスリートのキャリアに関する研究の位置づけ	4
第2節 アスリートのキャリアに関する研究の変遷.....	5
第3節 大学生アスリートのキャリアに関する研究の概観	6
第4節 本論文の目的および意義.....	14
第5節 本論文の構成.....	15
第2章 先行研究の検討	17
第1節 目的.....	17
第2節 方法（文献の収集方法）	18
第3節 結果と考察.....	19
第3章 大学生アスリートのキャリアに対する考え方・障壁・対処法.....	29
第1節 目的.....	29
第2節 方法.....	29
第3節 結果と考察.....	30
第4章 大学生アスリートのキャリア困難感についての測定尺度の整備	33
第1節 目的.....	33
第2節 調査1：大学生アスリートのキャリア困難感尺度の作成と内的整合性・基準関連妥当性の検討	33
第3節 調査2：大学生アスリートのキャリア困難感尺度の基準関連妥当性・再検査信頼性の検討	35
第4節 考察.....	36
第5章 総合討議.....	38
第1節 本論文において得られた知見	38
第2節 大学生アスリートへのキャリア支援に対する示唆	42

第3節 本論文の課題と今後の展望	44
引用文献	46
謝辞	56
添付資料	58

第 1 章 本論文の背景

第 1 節 スポーツ心理学におけるアスリートのキャリアに関する研究の位置づけ

アスリート（競技者）のキャリアについては、アスリート本人からの要請のみならず社会的にも重要な課題として位置づけられている。2001 年度より実施されたスポーツ振興基本計画（文部科学省，2001）において、不可欠な施策として「競技者が安心して競技に専念できる環境の整備」が掲げられ、競技者の引退後への配慮について触れるとともに、競技者に対するセカンドキャリア支援の充実を将来的な施策と位置づけている。続くスポーツ基本計画（文部科学省，2012）においても、“長期的な視点に立ってアスリートを育てていくことが必要であり、学業とのバランスも含め、キャリアデザインの重要性を認識することが重要である”と指摘している。また、アスリートのキャリアに関する実態調査（文部科学省，2019）において、アスリート本人からも“自分が思い描いていたものはアスリートとしての未来で終わっていた。現役中は明確な目標があったが（中略）今はそこまでの目標がない。これから先は探している最中”という意見や、“キャリアについて手本にすべき先輩がおらず、どのような道があるのか分からず苦労した”といった声が挙がっている。こうした背景を踏まえ、本邦では J リーグや、日本オリンピック委員会（JOC）などが携わりながらアスリートのキャリア支援が実施されている（吉田ほか，2006）。また、国外に目を向けると、豪州の ACE（National Athlete and Career and Educational Program）や米国の NCAA CHAMPS/Life skill program など、様々な国・地域でキャリア支援プログラムが開発され実施されている（吉田ほか，2007；日本スポーツ心理学会，2008）。

アスリートに対するキャリア支援の重要性が指摘され実際に支援がなされている一方で、スポーツ心理学の領域における彼らへの調査や研究は比較的限定されている。例えば、並木・堀野（2022）は、プロサッカー選手を対象とした心理面に関する文献についてレビューを行い 56 件の論文を抽出している。その結果、ストレスやコーピングに関する研究が比較的多く実施されており（22 件）、サッカー選手のメンタルヘルス支援に関する需要が高まっていると指摘している一方で、キャリアに関する研究は 2 件（Gouttebarger et al., 2016; Ulucan et al.,

2014) のみにとどまっている。加えてどちらの研究においても、引退後の生活やキャリアに関する内容については調査されていない。また、円滑な競技引退のためのキャリア教育プログラムが各国で実施されている一方で、これらの効果測定を行った研究例は少ないことも指摘されている（日本スポーツ心理学会，2008）。これらのことを踏まえると、アスリートのキャリア支援は重要な課題であり、実際に支援プログラムなどが開発・実践されている一方で、彼らへの調査・研究については限定的であり、今後の調査・研究の発展が期待される領域であると考えられる。

第2節 アスリートのキャリアに関する研究の変遷

アスリート（競技を主とする職業に就く者）に対するキャリアについての研究，中でも競技からの引退に着目されるようになったのは1950年代であり，その後1970年から1980年代に広く関心が寄せられるようになった（日本スポーツ心理学会，2008）。現在までに多様な機関，組織が支援に携わりながら，アスリートに対するキャリア支援が行われている（吉田ほか，2007）。Stambulova et al. (2021) によると，アスリートのキャリアに関する研究は大きく3つの時期に分けることができるとされている。初期の1960年代から1980年代には，アスリートの競技からの引退に着目しスポーツ以外のフレームワークを用いて理解しようとする試みがあった。具体的には，労働者の定年退職と同様の考え方をを用いて，競技からの引退を「社会的な死」と考え否定的かつトラウマ的な経験と捉えていた（Jodai and Nogawa, 2012）。しかしながら，一部の選手は非常に若い年齢で引退することや，将来に向けて希望を持って引退を決意する選手もみられており（Wylleman et al., 2016），「社会的な死」というほど否定的ではないことが明らかになってきている。その結果，1980年代から2000年代には，アスリートとしてのキャリアを人生の一部と位置づけ，スポーツ特有のフレームワークを用いて理解する動きがみられた（例：Athletic career termination model: Taylor and Ogilvie, 1994）。例えば，アスリートが競技で成功を続けるため（あるいは引退に移行する）要因の検討や，アスリートとしてのキャリアを人生の縮尺版として検討することなど（Stambulova, 1994）がなされてい

た。ただし、この時点ではアスリートの引退に着目する研究が主流であったとされ、競技からの引退による他の職業や生活への移行の質などが検討されていた。その後、2000年代以降には、スポーツ特有のフレームワークが確立されつつあり（例：Holistic athletic career model: Wylleman and Lavallee, 2004; Holistic ecological approach: Henriksen, et al., 2010）、様々な要因を考慮にいて全体的な観点からアスリートのキャリアを理解する動きがみられている（Stambulova et al., 2021）。具体的には、競技からの引退のみならず、幼少期、青年期、アスリートとしての活動期、引退後など、人生全体の観点からアスリートとしてのキャリアを位置づけて検討されるようになってきている。本邦におけるアスリートのキャリアに関する研究についても同様の経過をたどっており、阿部ほか（2021）は、1996年から2002年までは競技からの引退、2002年から2010年では支援制度、2011年から2020年にはキャリア発達と支援制度に関わる研究が盛んに行われたと指摘している。アスリートの競技からの引退に着目するだけでなく、スポーツ特有のフレームワークを用いて、支援制度やアスリートの取り巻く環境など様々な要因を含めて検討されるようになってきている。

第3節 大学生アスリートのキャリアに関する研究の概観

アスリートへのキャリアの研究や支援のみならず、大学生アスリートへの研究・支援も実施されるようになってきている（Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova et al., 2021）。アスリートは、競技を優先することで引退するまで将来を考えないことが指摘されており（Torregrosa et al., 2004）、実際に約40%のアスリートが引退後の生活やキャリアについて何も考えていないと報告されている（Torregrosa et al., 2015）。大学生アスリートへの着目の背景には、アスリートがキャリアの中で大学を選択する機会が増えている中で（荒井ほか, 2018）、学生時代にキャリアを考えておく必要性について声が上がっていること（文部科学省, 2019）、スポーツの強度・専門性が高まる中で、アスリートとしてのキャリアとその他のキャリアのバランスを取っていくことの難しさが挙げられる（荒井ほか, 2018; Wylleman and Reints, 2010）。また、大学スポーツの振興に関する検討会議（文部科学省, 2017）では、「学生アスリートにとって

大学時代は競技力向上の重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期」であり、大学は「将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出すことが重要である」とされている。キャリア支援において重要とされる時期は、大学卒業後にアスリートとして競技に専念しトップレベルを目指す前（あるいはトップレベルに到達する前）であり（文部科学省，2014），大学生アスリートは、競技レベルの高まりに伴う身体的・心理的な適応やライフスタイルの変化への対処だけでなく、将来のスポーツ・競技生活の終わりに向けた準備も求められている（Sum et al., 2017; Wylleman et al., 2016）。このような大学生アスリートに対するキャリア支援には、キャリアプランニングに関する研修や講義だけでなく、リーダーシップ養成やライフスキル教育等の支援もみられている（Navarro and Malvaso, 2015）。なお、大学生アスリートという用語について明確な定義は無いものの（長倉，2016），本論文においては大学運動部に所属し、競技に取り組んでいる学生を指すこととする。また、キャリアについて「職業との関わりにおける個人の行動」、あるいは「個人が具体的な職業や職場などの選択・決定をとおして創造していく個人のプロセス」とされている（渡辺，2018）。本論文においてキャリアは、将来の職業選択・就業（競技に関連するものも含む）に向けた個人の行動および考え方を指すこととする。

大学生アスリートのキャリアに関する研究は、アスリートに対する研究と同様に人生全体の観点からキャリアについて整理されるようになってきている。具体的には彼らのキャリアに関して個人，対人関係，環境の観点から検討されている。Wylleman et al. (2016) によると，大学生アスリートのキャリア移行（特に競技を終えたあとの生活や職業選択への移行）は，動機や信念などの個人の心理的要因（例：学生アスリートのキャリアに対する認識，競技とキャリアに対するモチベーション，競技成績，楽観主義など），親・チームメイト・メンター等との対人関係・サポートの程度（例：親の期待やプレッシャー，メンターからの助言など），学校や組織などの環境（大学や他の機関でのキャリアサポートプログラムや教育プログラム）に影響を受けるとされる。実際に Sum et al. (2017) は台湾の大学生アスリートのキャリアに関してインタビュー調査を実施し，個人，対人関係，環境の側面から整理している。個人にはキャ

リア目標、アイデンティティ、自己効力感、モチベーション、性格が含まれ、対人関係の側面には親、教師、チームメイト、コーチからのサポートが含まれている。また、個人を取り巻く環境には、例えば学業、医療ケア、財政なども考慮されている。

デュアルキャリア研究の広がり

以上のように、アスリートおよび大学生アスリートの双方において、キャリアを全体的な観点から検討しようとする動きがみられている。その中で、欧米においてはデュアルキャリア（DC）が推進されている。DCとは「長い人生の一部である競技生活の始まりから終わりまでを、学業や仕事、その他人生それぞれの段階で占める重要な出来事やそれに伴う欲求とうまく組み合わせていくこと」と定義されている（EU expert group on “education and training in sport”, 2012；文部科学省，2014）。簡潔な表現として「エリートスポーツと学業，もしくはエリートスポーツと仕事という二つのキャリアを背負っている状況をデュアルキャリア」と呼び、「アスリートは，その生涯の中のある一定期間，人としてのキャリア形成とアスリートとしてのキャリア形成の両方を同時に取り組むことになる」とされている（文部科学省，2014；Stambulova and Wylleman, 2019）。DCは，目の前の課題に対して「短期的な勝者」になることによって，将来のキャリアが拓かれると考えられ推進されている（Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova et al., 2021）。そのため，特に大学生アスリートに関しては学業との両立または学業の継続を促すことで将来のキャリアが拓かれることが想定されており，調査や支援方法について盛んに議論されている。Guidotti et al. (2015) は欧州におけるDCを扱った研究の文献レビューを行い，採択された49件の文献のうち，ミクロレベル（DCの経験やキャリア移行に対する考え，モチベーション，ドロップアウトの理由などの個人の経験）を検討した文献が35%（17件），マクロレベル（スポーツのエリート学校の国ごとの違い，キャリア支援プログラム，教育の流動性などの組織・環境）を検討した文献が35%（17件），グローバルレベル（DCに対する政策やトップレベルスポーツのマネジメントなどの行政や政治）について扱った文献は18%（9件）であったと報告している。このことは，研究者の関心が個人レベ

ルまたはプログラム等の影響について調査することにあると指摘している (Guidotti et al., 2015). また, 大学生アスリートにおいて競技者以外のキャリアの選択肢が制限されないためには, 個人の対処, 家族からのサポート (励ましや経済的援助を含む) のみならず, 関連機関 (オリンピック委員会, 教育・スポーツ関連省庁, クラブ, 大学等) の計画・支援が重要であることが指摘されている (Wylleman and Reints, 2010).

ここまでアスリートおよび大学生アスリートのキャリアに関する研究や DC について概観を示したが, 大学生アスリートを対象とした研究の多くは調査研究である (Guidotti et al., 2015; Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova and Wylleman, 2019). また, 多くが DC (主に, 競技に取り組みながら学業にも取り組む) に焦点が当てられており, 大学生アスリートに対するキャリア移行を促す支援・介入 (大学卒業後のキャリアや進路への関心を高めより良い意思決定を促すための支援) に関する研究についてはあまり整理されていない (課題 1). DC を推進することは競技者以外のキャリアの選択肢を狭めないために重要とされ (Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova et al., 2021), 彼らが職業・就業について考えることや選択することを促すための支援は異なる文脈で実施されている. 大学生アスリートの多くがアスリートとしてのキャリアを歩むことができるわけではなく, 在学中に競技者以外へのキャリアへの意思決定をしなければならない場合もある. そこで本論文では, まず, 大学生アスリートに対する現状のキャリア移行支援についての整理を行う. これにより, 大学生アスリート自身がどのようにキャリアに対して取り組むべきかを明らかにすることができると同時に, キャリア支援担当者や支援機関における支援方法の検討の一助になると考えられる. スポーツに関する第三次基本計画 (文部科学省, 2022) において, スポーツ団体, 企業, チームなどにおけるアスリートに対するキャリアについてのサポートと機会が不足していることについて指摘しており, こうした支援について整理することは, 大学生アスリートおよび関係者にとって重要と考えられる.

大学アスリートのキャリア移行に関する研究

大学生アスリートのキャリア支援について概観を示し、DCに関する研究が展開されていることを述べてきたが、実際に大学生アスリートはどのようにキャリアについて考え、取り組んでいるのだろうか。具体的には、大学卒業後の進路や職業選択に関してどのように捉えており、どのような問題に直面し、それをどのように対処しているのだろうか。先行研究によると、大学生アスリートのキャリアに対する考え方には、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリア(学業の継続または就業)、競技と学業または就業の両立の選択肢があることが窺える。例えば、Ryba et al. (2017) は、フィンランドのエリートレベルの競技力を持つ高校生一年生(18名)を対象にインタビュー調査を実施し、3つのキャリアに対する考え方を特定している。それは、競技と学業をテーマとして持つ考え方、1つのテーマだけを考慮する考え方(主にアスリートとしてのキャリアを考慮)、競技や学業に関係なくキャリアを考えられていない場合であった。競技と学業のテーマの両方を持つ学生は12名、1つのテーマのキャリアを考えている学生は5名であり、高いレベルにある高校生の全てが競技のみに焦点を当てているわけではないことが明らかになっている。また、彼らは競技と学業のバランスのとり方に関する内容については具体的に話すことができた一方で、競技者以外の将来の目標については漠然としていたことを指摘している(Ryba et al., 2017)。また、Vickers and Morris (2022) は、イギリスの大学生アスリート(11名)とその関係者(8名)を対象にインタビュー調査を行い、大学卒業後、大学生アスリートは以下の4つの経路のいずれかを選択できることを明らかにしている。学業と競技の継続、競技者としてのキャリアへの移行、競技と仕事・職業の両立、競技を引退し異なるキャリアの追求であった。大学生アスリートにおいては、キャリアに関していくつかの選択肢があるだけでなく、学業を継続することが怪我などによる早期の競技引退に対するセーフティーネットとして働くと同時に、管理職などの雇用機会を増大させる可能性があることを指摘している(Vickers and Morris, 2022)。

また、大学生アスリートが直面するキャリアに関連する問題に関して、Sum et al. (2017) は香港と台湾の大学生アスリートを対象にインタビュー調査を実施した結果を報告している。

そこでは、プロのアスリートとしての仕事を得ることや継続すること難しさ、競技者以外での職業選択・キャリア選択について何も分からないこと、勉強に集中したい一方で勉強する時間がないことなどに問題を抱えていることが示されている。Cartigny et al. (2021) は、大学での学業と競技の両立を行った経験を持つアスリートまたは学業と競技の両立を行ったが現在は引退しているアスリートへのインタビュー調査を実施している。その結果、競技引退後のキャリア目標（競技以外に就きたい職業ややりたい仕事）と、自身の持つ職業スキルとの間にギャップが生じる可能性があることを指摘している。競技者としてスポーツに集中することによって、競技者以外の就業のために必要なスキル・能力を養う時間が無くなってしまう可能性があるとされている。また、Brown et al. (2015) においてもイギリスの大学生アスリート（現役 6 名、卒後 3 名）と関係者（コーチ 9 名、サポートスタッフ 3 名、責任者 5 名）とのインタビュー調査を実施し、大学生アスリートが大学生活中に経験する問題に焦点を当て、それに応じてどのように対処しているかを調査している。大学生アスリートが経験する問題は競技レベル、学業/職業レベル、心理レベル、社会的レベルから記述され、大学卒業後のキャリアの選択は学業/職業レベルの問題の 1 つと捉えられている。これに対する対処戦略（計画、優先順位の変更、スタッフとのコミュニケーション、学習へのオープンさの表示など）およびリソース（人間関係スキル、楽観的・ポジティブな性格、意思決定能力、スタッフからのサポート、ロールモデル、大学の講義など）が必要であることが示されている。

日本の大学生アスリートに関するキャリア移行に関する研究

日本におけるアスリートのキャリアに関する研究は主に（トップ）アスリートを対象に実施され（例：北村・木内，2022；飯尾ほか，2023；Oulevey et al., 2018），大学生アスリートのキャリアに研究は DC（特に学業とスポーツの組み合わせ）やライフスキルに焦点が当てられている。例えば、DC に関連する研究として、荒井ほか（2018）は大学生アスリートの競技とそれ以外の生活の組み合わせについて「アスリート・ライフ・バランス」を提案している。全国大会レベルでの競技経験のある学生とのインタビュー調査を実施し、アスリート・ライフ・

バランスの、促進・阻害要因について検討を行っている。また、東原ほか（2019）はアンケート調査を通じて、学業とスポーツのバランスに対する態度は、入学前に決定する要因（例えば、入試形態や入学前の学業成績）よりも、大学入学後の学業や競技成績によって影響を受けることを明らかにしている。

また、ライフスキルとキャリアの関係に焦点を当てた研究もみられている。ライフスキルとは、日常生活における問題や課題に対して適切に対処するためのスキル（世界保健機関, 1994）であり、例えば、意思決定、問題解決、創造的思考などが含まれている。これらのスキルを用いることで日常生活のみならず、人生の重要なイベント（ライフイベント）にも適切に対処することができる（Danish et al., 1992）。このようなライフスキルについて、清水・島本（2011）は大学レスリング選手のキャリア移行に関連する要因としてライフスキルを調査し、目標設定が重要であることを明らかにしている。また、山本・島本（2019）もライフスキルを用いて調査を実施し、大学柔道選手においても目標設定スキルと問題解決スキルが重要であることを示している。

以上の国内外の先行研究を踏まえると、大学生アスリートは大学卒業後の進路として競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリア、競技と学業の継続など、いくつかの選択をすることが可能である一方で、彼らの抱える問題や課題に関しては競技者以外のキャリアを選択することに伴うもの（例えば学業の継続の方法や、競技以外にやりたいことを見つける等）に焦点が当てられているといえる。また、本邦における大学生アスリートのキャリアに関する研究は上述のようにライフスキルおよび DC に焦点が当てられており、彼らのキャリア移行に関する経験に焦点を当てて調査した研究は未だ少ない（課題2）。そこで、大学生アスリートのキャリア移行に関する経験について、競技者としてのキャリアも含めて記述し、彼らのキャリア移行に対する考え方や課題・問題について整理を行う。特に、彼らがどのようなキャリアについて考え、どのような問題・課題に直面し、どのように対処しているのかを検討する。これにより大学生アスリートのキャリア移行に関してこれまでよりも実態に即した理解が可能になり、競技者としてのキャリアをどのように支援の枠組みに入れて検討すべきかについて

の基礎資料となると考えている。

大学生アスリートのキャリア移行に伴う困難についての測定尺度に関する先行研究

大学生アスリートがキャリアを考える際には競技者以外のキャリア（特に就業・職業）のみならず、競技者としてのキャリアも検討している（Kulcsár et al., 2020）。実際に大学卒業後の進路に対する考え方には、競技者（主に競技を通じて収入を得るプロ選手などを指す）を目指す場合と競技者以外の職業に就く場合のどちらかを選ぶような考え方や、競技と競技以外（主に学業）の双方に取り組む考え方などがある（Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017）。しかしながら、彼らのキャリアに対する考えに付随する困難については、競技者以外のキャリアをアスリートが考える際に経験するものに限定されており、測定尺度もあまりみられていない。学生アスリートのキャリア状況尺度（Student-Athlete Career Situation Inventory ; SACSI: Sandstedt et al., 2004）においては、下位因子の一つとしてキャリア発達の障壁（Barriers to career development）が含まれている。この障壁には時間のなさ、エネルギーのなさ、情報へのアクセスのしにくさ等が含まれており、競技者以外のキャリアを考えることに対する障壁を測定している。大学生活へ積極的に関与したり、個人的な話を他者とすることなどの社会的な充実体験によって、障壁が軽減されることが指摘されている（Cox et al., 2009）。また、キャリア発達の障壁とキャリア発達の自己効力感（career development self-efficacy; Sandstedt et al., 2004）に弱い負の相関関係にある事も明らかになっており（Chung-Ju et al., 2016）、キャリア選択に対する自信の程度がキャリアを考える際の障壁の程度と関連があることがわかる。また、大学生アスリートのキャリア選択における悩みに関する尺度も開発されている（Ono et al., 2022）。この尺度は、競技に傾倒していることによって生じる競技者以外のキャリアを選択する際の悩みが測定されており、下位因子には、進路決定をした場合に生じることへの悩み、競技のことに集中したいという悩み、競技の継続に関する悩み、スポーツしか出来ないという悩み、情報不足に関する悩みが含まれている。この尺度においても、キャリア選択の自己効力感（安達, 2001）と中程度から弱い負の相関が示されている（Ono et al., 2022）。

上記のように大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難に関連する内容を測定する尺度はいくつかの研究で取り上げられているものの、主に競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難に焦点を当てたものが殆どである（課題 3）。つまり、大学生アスリートの競技からの引退または競技者以外のキャリアへの移行を妨げる心理、社会的な要因を測定している。一方で、大学生アスリートがキャリアを考える際には、競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアを考えている可能性があることを踏まえると（Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017）、本論文において、競技者および競技者以外のキャリアを扱うことで、それぞれのキャリアへのアプローチが可能になると考えられ、彼らへのキャリア支援方法の検討の一助になると考えられる。特に彼らの抱えるキャリアの困難において、特徴的な因子や要因について明確化することでアセスメントの視点を提供することができるとともに、将来的には他の変数との関連性を検討することで、困難感の機能について理解する一助となると考えている。

第 4 節 本論文の目的および意義

大学生アスリートは、競技者としてのキャリアと競技者以外のキャリアを視野に入れて将来を選択する一方で、競技者としてのキャリアを踏まえて彼らのキャリアに対する考えを記述・検討した研究は少ない。これまでの研究は多くが調査研究であり、DC（例えば、学業に対する動機付け）の促進・阻害要因の検討にとどまっている。本論文では、以下の 3 点を明らかにすることで、大学生アスリートのキャリア移行についての理解の深化を目指した。

(1) 大学生アスリートに対するキャリア移行を促す支援（大学卒業後の競技者以外のキャリアや進路への関心を高めより良い意思決定を促すための支援）に関する研究について文献レビューを行い、本領域の現状および展望を記述すること（課題 1 に対応）。これにより、大学生アスリート自身がどのようにキャリア移行に取り組むべきかについて明らかにすると同時に、キャリア支援の担当者や支援機関においてどのような支援方法を取るべきかについての一助になると考えている。

- (2) 大学生アスリートのキャリア移行に関する経験について、競技者としてのキャリアも含めて記述すること（課題 2 に対応）。これにより、大学生アスリートのキャリア移行についてより実態に即した理解が可能になり、競技者としてのキャリアをどのように支援の枠組みに入れて検討すべきかについての基礎資料となると考えている。
- (3) 競技者以外のキャリア（主に就業に関連するキャリア）のみならず、競技者としてのキャリアについてもキャリアと捉え、彼らの抱える困難について検討する測定尺度の整備を行うこと（課題 3 に対応）。これにより、彼らの抱える困難における主要な因子・要因の特定に繋がり、キャリア支援の際のアセスメントの視点を提供することができると考えている。

第 5 節 本論文の構成

本論文は、以下の章より成り立つ（図 1）。まず第 1 章では、アスリートおよび大学生アスリートのキャリアに関する研究の概観および課題について提示した。次いで第 2 章では、大学生アスリートのキャリア移行を促す支援についての研究のレビューを行い、本領域の現状と展望を記述した。第 3 章では、本邦における大学生アスリートのキャリア移行の経験についてインタビュー調査を行い、彼らのキャリアに対する考え、困難、対処について整理を行った。第 4 章では、第 3 章で得られた知見および先行研究を基に、競技者としてのキャリアに関連する項目を測定する尺度の整備を行った。第 5 章では、全体についての総合討議を行った。

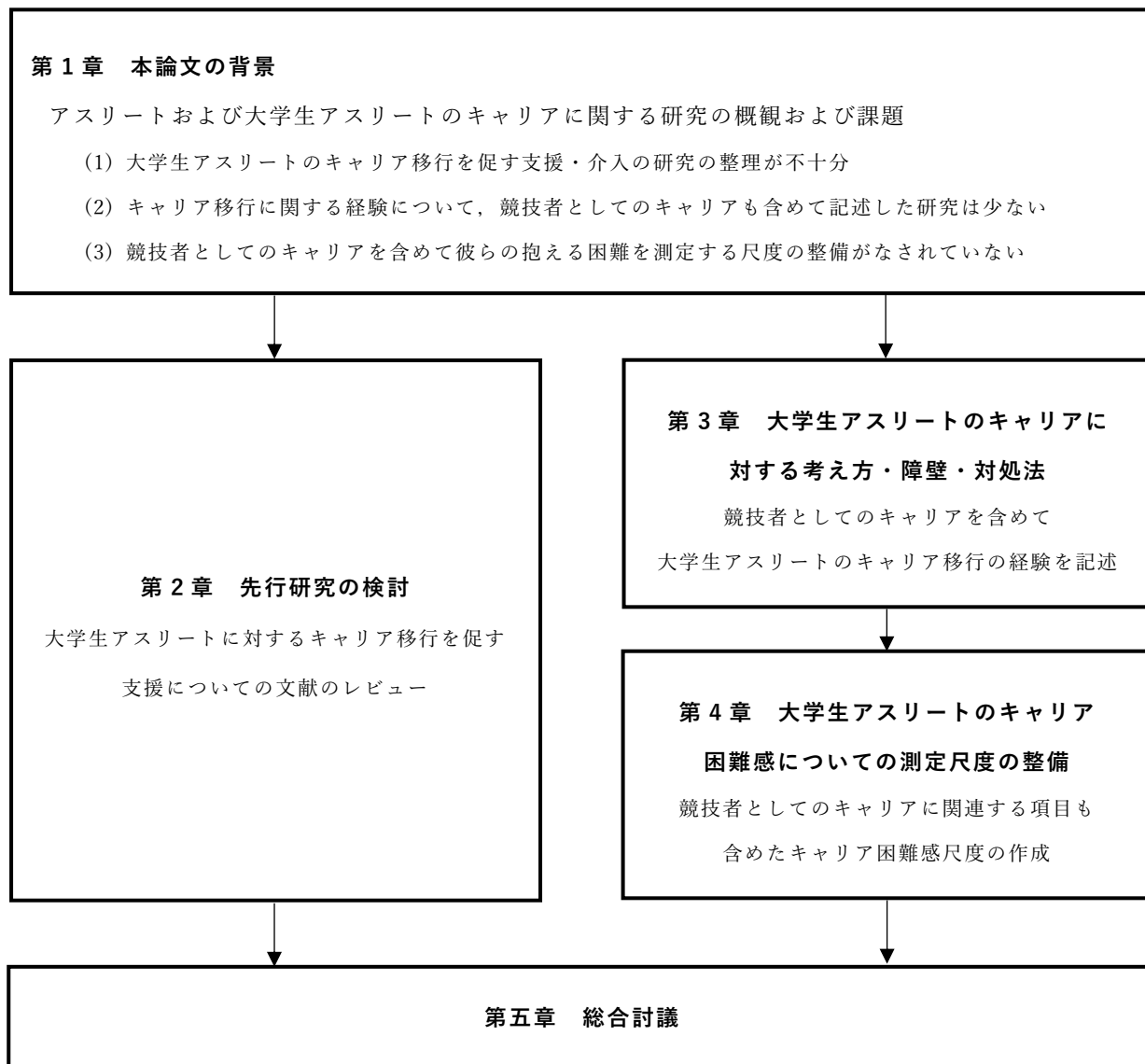


図1 本論文の構成

第2章 先行研究の検討

第1節 目的

大学生アスリートのキャリアに関する研究やデュアルキャリア（DC）について概観を示したが、大学生アスリートを対象とした研究の多くは調査研究である（Guidotti et al., 2015; Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova and Wylleman, 2019）。わが国においても DC への関心は高まりつつあり、荒井ほか（2018）が DC に向けてスポーツ・ライフ・バランスの重要性を指摘しているが、実際に支援や介入を行いその効果を検討した研究は殆ど見られていない。第三期スポーツ基本計画においても、「各スポーツ団体、企業、チーム等によるアスリートのキャリア形成支援についての取組の好事例がスポーツ界全体に幅広く浸透しておらず、アスリートが地域や職場での運動指導、スポーツの価値を伝える活動に関わる機会も不足している」と指摘されている（文部科学省，2022）。DC 推進のために学生アスリートの重要性が指摘されているにも関わらず、運動部活動に所属する大学生に対する学業支援・キャリア支援を行っている大学は約 30%となっている（文部科学省，2018）。このことは、わが国における大学生アスリートのキャリア支援、特に学業支援以外の具体的な方法については、各支援者・支援組織が模索しながら実施している段階であると言えるだろう。大学生アスリートへの調査において、キャリアに関して長期的なビジョンを持っていないこと、キャリアの重要性は理解しているものの何をすべきか分からないことが指摘されている（Tokuyama, 2015）。学業との両立を促すことも重要なキャリア支援の方法ではあるが、このこと自体が直接的に大学生アスリートの将来的なキャリアの不透明さを解消するわけではないことから（Navarro and McCormick, 2017）、大学生アスリートがアスリートとしてのキャリア以外で将来のキャリアを描けるような支援方法についての議論も重要と考えられる。

そこで本章では、大学生アスリートに対するキャリア支援、中でも学業と競技の両立を主目的とした支援ではなく、競技者以外のキャリアへの移行を促す支援に関する文献レビューを行い、大学生アスリートに対する支援の現状と具体的な支援内容について検討することを目的とする。なお、ここでの学業と競技の両立に関する研究とは、DC の文脈で検討されている

学業への取り組みを支援することを主目的とした研究を指し、具体的には学業と競技のバランスを保つ方法や、学業に関するサポートの拡充、単位取得・履修の方法に関する支援などが含まれる (Stambulova and Wylleman, 2019)。また、ここでのキャリア移行を促す研究とは、大学卒業後において大学生アスリートが競技者としてのキャリアのみならず競技者以外のキャリアへの関心を高め、より良い意思決定を行うための支援を主目的とした研究を指し、具体的にはキャリアカウンセリングや興味に基づく職業選択の支援、職業に関する情報提供などが含まれる (Spokane and Nguyen, 2016)。大学生アスリートに対する支援の現状および支援内容・要素を明らかにし、支援者・支援機関に有用な支援プログラムの構築の一助となるだけでなく、大学生アスリート自身のキャリア形成の自助に繋がることを期待して実施した。

第2節 方法（文献の収集方法）

2022年8月16日に、海外文献については SPORTDiscus, ERIC, PsycArticles, PsycInfo, Web of Science, Scopus を用い、国内文献は、Cinii, J-stage を用いて検索を行った。海外文献の検索には、「(student athlete OR athlete student) AND (career OR occupational OR vocational) AND (intervention OR counseling OR guidance OR program)」を、日本語文献の検索には、「学生アスリート and キャリア」を用いた。採択基準を A) 英語、または日本語で書かれており、全文の入手が可能なこと、B) 査読を経た論文であること、C) 大学生アスリートが対象者となっていること、D) キャリア移行に関連する支援を実施し支援内容の記述があること、またはキャリア移行に関連するアウトカムが設定されていること、とした。また除外基準を、①総説・レビュー論文、紀要論文、学術総会等の抄録、ポスター発表、本などのチャプターであること、②学業との両立を主目的として検討した研究であること、③支援の具体的な方法（回数・期間・内容等）が記載されていないこと、と設定した。以上の手続きに基づき、海外文献では 594 件の文献が検索され、そのうち重複文献 198 件を除く、396 件が分析対象となった。国内文献では、82 件の文献が検索され、そのうち重複文献 3 件を除く 79 件が分析対象となった。上記採択基準 ABCD および除外基準①②③に準拠しなかった論文を除

外し，海外文献 7 件，国内文献 0 件が分析対象となった（図 1）。

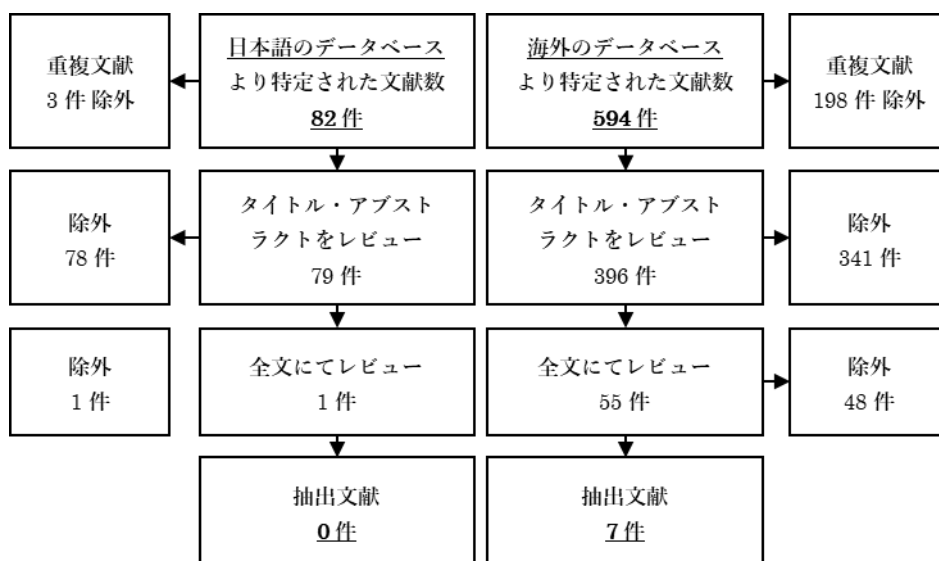


図 1 対象論文の抽出過程

第 3 節 結果と考察

分析対象となった 7 件の文献を表 1 に示した。理論的背景，研究デザイン，アウトカムにバラつきがみられたため，先行研究（Whiston et al., 2017）において影響が指摘されている介入の回数（セッション数）により介入の内容および効果を整理する。それぞれの回数に応じてどのような支援が提供されており，どのような研究が進められているのかを整理することで，支援者・支援機関が自身の状況に応じて取り得る支援方法について検討できると同時に，競技に没頭する傾向のある大学生アスリート（Turick et al., 2021）への支援の提供方法について検討することが出来ると考えている。なお，Whiston et al. (2017) はキャリア選択への介入の効果に関するメタ分析を行い，セッション数が 5 回目までは介入効果が高まるものの，6-7 回では効果が低下し，8 回以降の場合は有意な効果が得られてないと指摘しており，5 回の介入を推奨している。本レビューにおいても Whiston et al. (2017) において推奨され，介入効果が得られると期待される 5 回以下と，6 回以上に分けて介入の内容および効果を整理する。

表1 採択文献の概要

No	著者	対象者の国・地域	研究デザイン	人数	実施競技	介入内容・構成要素	セッション	アウトカム (使用尺度)	主な結果
1	Van Raalte et al. (2017)	アメリカ NCAA Division I, III	準実験デザイン 対照群: ストレスへの気付きに関するワークショップへの参加	158	野球, バスケケットボール, ビーチバレー, クロスカントリ, アメリカンフットボール, ゴルフ, 体操, ラクロス, ライフル射撃, ラグビー, セイリング, サッカー, ソフトボール, テニス, 陸上競技, バレーボール	<p>キャリア探索のワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問紙の回答から、自身の強みについての情報提供 自身の強みをキャリアと関連する目標を結びつける情報の提供 自身のスポーツの経験を振り返り、キャリアへの応用を促進 <p>認知的キャリア意向のグループカウンセリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 自身のキャリア信念・自己理解の促進 アサーティブトレーニング 価値・人生の意味の明確化 サポート環境の構築 関心のある職業で働く人へのインタビュー スモールグループでのディスカッション 	1セッション 1回1時間	<ul style="list-style-type: none"> キャリア選択の自己効力感 (Career Decision Self-Efficacy Short-Form; Betz and Taylor, 2001) 介入に対する受容性 (Treatment Acceptability Questionnaire; Hunsley, 1992) 	介入によってキャリア自己効力感が有意に高まり、受け入れ可能な介入と評価された。
2	Peng and Johanson (2006)	台湾	準実験デザイン 対照群: キャリアに関する内容が含まれない通常のグループカウンセリングへの参加	65	未記載	<ul style="list-style-type: none"> 自身のキャリア信念・自己理解の促進 アサーティブトレーニング 価値・人生の意味の明確化 サポート環境の構築 関心のある職業で働く人へのインタビュー スモールグループでのディスカッション 	2週間 2セッション	<ul style="list-style-type: none"> キャリア成熟度 (Career Maturity Inventory; Crities, 1978) 状態不安 (State-Trait Anxiety Inventory; Spielberger et al., 1970) 	キャリア成熟度は差異が見られなかったが、不安感低介入群の方が低かった。
3	Nelson (1982)	アメリカ NCAA / AIAW	無作為化比較試験 対照群: コントロール群	132	アーチェリー, 野球, バスケケットボール, ゴルフ, 体操, サッカー, 水泳, テニス, 陸上, レスリング, フィールドホッケー, ラクロス, 馬術, バレーボール	<p>キャリアグループカウンセリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の未来を究つめ、価値観の明確化 他者の意見を取り入れる キャリアに関連するコンピテンシーの理解 興味・関心の精製し アドバイザーとの個人セッション, 情報源の紹介 	5週間 5セッション 1回2時間	<ul style="list-style-type: none"> GPA 	実験群の平均GPAは2.41であったのに対し、対照群は2.17で有意な差がみられた。
4	Murdock et al. (2016)	アメリカ NCAA Division I	横断研究	100	未記載 (diverse group of intercollegiate sports)	<p>集団指導プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> グループセッション (卒後の進路に関する情報提供) ワークショップ (ゲストスピーカーを招き、キャリアの探索方法からファイナンシャルプランニングの考え方についての講義と実践) <p>ポジティブトランジションプログラム (講義, 議論, ゲストスピーカー, ロールプレイ, グループ学習)</p> <ul style="list-style-type: none"> アイデンティティの発展: 価値, パーソナリティ, 興味関心の探索 トランスファラブルスキルの養成: 目標設定, コミュニケーション, 意思決定等のスキル養成 キャリア探索: 競技後の生活に関する準備と計画, 履歴書作成, 仕事に関するインタビューの実施 	任意の7セッション 1回1時間	<ul style="list-style-type: none"> 競技者アイデンティティ (Life After Sport Scale; Harrison and Lawrence, 2002) 	プログラムへの参加ではなく、性別およびGPA (成績) が、競技者アイデンティティの低減に影響していた。
5	Stankovich et al. (2001)	アメリカ NCAA Division I	記述なし	139	未記載 (32 varsity sports)	<p>学習理論に基づくキャリアカウンセリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 興味関心の拡大 変化する仕事への準備 行動するよう促す 職業選択だけでなく、様々なキャリアの問題へ対処 	10週間 (2単位相当)	未記載	プログラムの参加者は、キャリア成熟度、キャリアに関する自己決定スキル、競技からの引退への準備性が高まり、競技者アイデンティティが低減した。
6	Shurts and Shoffner (2004)	未記載	事例研究	1	サッカー	<p>学習理論に基づくキャリアカウンセリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 興味関心の拡大 変化する仕事への準備 行動するよう促す 職業選択だけでなく、様々なキャリアの問題へ対処 	最少で2年	未記載	このキャリアカウンセリングでは学生アスリートが現在持っている興味・関心や能力から職業選択を促すのではなく、新しい経験や体験を探索することを促し、キャリア探索を導くことができる。
7	Burns et al. (2013)	アメリカ NCAA Division I	横断研究	158	アイスホッケー バスケケットボール ラクロス テニス 陸上競技	<p>NCAA CHAPMS / Life Skill program</p> <ul style="list-style-type: none"> オンラインでの職業アセスメント キャリアカウンセリングへの相談 ワークショップ (履歴書作成, キャリアプランニング, インターンシップ) 	未記載	<ul style="list-style-type: none"> キャリア選択の自己効力感 (Career Decision-Making Self-Efficacy Scale; Betz et al., 1996) 	プログラムへの満足度が高いほど、キャリア選択の自己効力感が高かった。

5 回以下（5 セッション以下）

5 回以下の介入については 3 件が抽出され、準実験デザインが 2 件、無作為化比較試験が 1 件であった。Van Raalte et al. (2017) は、NCAA Division I と NCAA Division III に所属する大学生アスリートに対し、1 セッション（1 時間）のキャリア探索のワークショップを実施し（対照群はストレスへの気づきに関するワークショップ）、キャリア選択の自己効力感、介入に対する受容性への効果を検討した。競技の中で身に付けたトランスファラブルスキル（transferable skill：目標設定、コミュニケーション、意思決定などの競技以外の領域にも活用できるスキル）を把握し、自発的なキャリア探索スキルを身に着けるように設計されている。介入内容については、大学生アスリートを含む多様な関係者の意見を取り入れており、具体的な介入のガイドについても著者の紹介するサイトより入手可能である（参考：<http://www.supportforsport.org/index3.html>）。介入の結果、対照群と比較して介入群の方がキャリア選択の自己効力感が高くなったことが示されている。Peng and Johanson (2006) は、台湾の 1 年生の大学生アスリートに対し、2 週間で 2 セッションの認知的キャリア志向のグループカウンセリングを実施し（対照群はキャリアに関する内容を含まない通常のグループカウンセリング）、キャリア成熟度、不安感への効果を検討した。特色として、認知理論に基づき、キャリアの意思決定に関連するキャリア信念への認知再構成法を用いた点が挙げられる。介入の結果、対照群と比較して不安感を低減させる効果がみられたが、キャリア成熟度には差がみられなかった。このことについて、対象者が 1 年生であったことから不安感が高かった可能性があること、2 週間という短い時間での実施であったことが影響していると考察されている。また、Nelson (1982) は NCAA および AIAW に所属する大学生アスリートの 1 年生に対して、5 週間 5 セッションのキャリアグループカウンセリングを実施し（対照群は統制群であり介入なし）、GPA に与える影響を検討している。大学生アスリート自身の価値観・興味を把握すること、他者の意見を取り入れること、スキル・能力を把握すること、キャリア・仕事の領域と自身の特徴（価値観、スキル等）を統合することなどが含まれている。介入群は対照群に比べて、専攻分野をより多く変更しており、自身の専攻によ

り満足し GPA も高いことが示されている。このことについて、介入によって自身の考えとキャリアや労働市場の情報の統合を促進することができた可能性を指摘している。

5 回以下の介入においては、5 回以上の介入に比べ介入効果を測定する研究デザインが整えられており、実際に介入の効果も確認されている。このことは先行研究で指摘されたことと類似しており (Whiston et al., 2017)、大学生アスリートにおいても介入回数の少なさ (例えば 1-2 回の介入) が介入の効果に及ぼす影響は限定的であることが示唆される。また、介入方法に関して、カウンセラー (Peng and Johanson, 2006) やアカデミックアドバイザー (Nelson, 1982) によるグループでの支援、オンラインでの介入 (Van Raalte et al., 2017) と方法は異なるものの、介入の効果を高めるような手続きとして、カウンセラークライアントの相互的なコミュニケーションの時間を取る (Peng and Johanson, 2006) や、同じ担当者がセッションの担当をすること (Nelson, 1982)、介入内容について関係者から意見を取り入れ、実施時に参加者に対して介入内容について詳細に提供すること (Van Raalte et al., 2017) が含まれていた。5 回以下の介入であっても効果を高めるような手続きを含め、介入効果を測定する研究デザインを設計することで、適切に効果を検証することが出来ると考えられる。

一方で、Peng and Johanson (2006) の研究において、不安感の低減に効果がみられたもののキャリア成熟度への効果はみられていない。この点に関して、介入内容およびアウトカムの測定から差異を考察する。介入内容では Peng and Johanson (2006) は認知再構成法を用いており、学生アスリートの持つキャリアへの信念や気分を焦点を当てたことで不安感の低減に効果がみられたが、キャリア成熟度には影響がみられなかった可能性が考えられる。Van Raalte et al. (2017) では競技で培ったトランスファラブルスキルに焦点を当てたことや (学生アスリートからは初めての経験で有用だったと評価されている)、Nelson (1982) ではキャリアカウンセリングセッションとしてキャリアカウンセリングのパッケージを提供しており、介入内容の方向性による影響が示唆される。また、アウトカムの測定に関してキャリア成熟度 (Nelson, 1982) とキャリア選択の自己効力感 (Van Raalte et al., 2017) が測定

されているが、キャリア成熟度はキャリアに関する意思決定の能力の発達を測定し、キャリア選択の自己効力感やキャリアに関連するタスクを遂行する自信の程度を測定しているとされる (Prideaux and Creed, 2001)。キャリア成熟度は短期的に変化しにくい能力の程度を測定しようとしているのに対し、キャリア選択の自己効力感や何かしらの介入で変化する可能性のある自信を扱っていることから、短期間での介入効果にも差異が出た可能性がある。

6 回以上 (6 セッション以上)

6 回以上の介入では 4 件が抽出され、横断研究が 2 件、事例研究が 1 件、研究デザインについて記述のない研究が 1 件であった。Murdock et al. (2016) は、NCAA の Division I の学生アスリートに対して任意の 7 セッションの集団指導プログラムを実施し競技者アイデンティティへの影響を調査している。競技後の生活に焦点を当て、経済面、大学院進学、就職活動などについての幅広い講義が実施されている。大学生アスリートの参加は任意であったことから全てのプログラムに参加しているわけではなく、2 回以上のセッションに参加した学生は 34 名 (30.9%) であった。1 つ以上のセッションの参加による競技者アイデンティティへの効果は認められなかった。このことについてキャリアに関連する問題について家族やその他のコミュニティで議論されていた影響の可能性を挙げており、キャリアに関するサポートの重要性とより焦点を絞った支援の重要性が指摘されている。Stankovich et al. (2001) は、大学 3-5 年生の大学生アスリートに対して、大学の講義として 10 週間 (2 単位相当) のポジティブトランジションプログラム (The positive Transitions Sport Retirement Model に基づく) を実施した。このプログラムには、アイデンティティの発展、トランスファラブルスキルの養成、キャリア探索に関する内容が含まれている。結果についての詳細は記述されていなかったが、キャリア成熟度、キャリアの意思決定スキルの自信、競技からの引退への準備性が高まり、競技者アイデンティティが低減したと報告している。Shurts and Shoffner (2004) は、学習理論に基づくキャリアカウンセリングを実施した。このカウンセ

リングは、大学生アスリートがスキルや興味を多様化させ、自身の価値観への理解を深め、表現方法を探ることを支援し、現在持っている価値観・興味だけではなく、それ以外の領域に関心を持つことを推奨する支援方法である。大学のキャリア支援プログラムの一環として、3年次、4年次のそれぞれで最低2回のカウンセリングが義務付けられていた。ある大学3年生に対してキャリアカウンセリングを実施し、その支援経過について記述している。Burns et al. (2013) は、NCAA Division I に所属する学生アスリートに対して、NCAA CHAMPS または Life Skill program に基づくアカデミックサポートプログラムが、キャリア選択の自己効力感に与える影響について調査している。プログラムには、オンラインでの職業アセスメント、キャリアカウンセラーへの相談、履歴書、キャリアプランニング、インターンシップなどのワークショップが含まれていた。アカデミックサポートサービスへの満足度が高いほど、学生アスリートは高いキャリア選択の自己効力感を持っていた。

6回以上の研究の場合、介入効果を厳密に検証する研究デザインおよびデータは取られておらず、これらの介入におけるキャリア支援の効果を検証することに課題がみられる。介入の実施形態も多様であり、キャリアカウンセラーによるキャリアカウンセリング (Shurts and Shoffner, 2004)、大学の講義の一環として教科書を用いた介入 (Stankovich et al., 2001)、体育課のスタッフまたはキャリアセンタースタッフによるワークショップ

(Murdock et al., 2016)、大学横断的なプログラム (Burns et al., 2013) がある。大学生アスリートに対して様々な方法でキャリア支援の取り組みがなされていることが推察される。介入の効果について断定することは難しいものの、単発的なキャリアの講義への参加

(Murdock et al., 2016) よりも、講義や義務付けられた参加であってもキャリアに関する一連の支援を受ける (Stankovich et al., 2001; Burns et al., 2013) 方が、効果が生じる可能性がある。本レビューで抽出された文献においては介入の回数が6回以上であることが必ずしも効果の低減や消失に繋がる訳ではなく、セッション数に応じて脱落の予防も含めた支援が求められるといえる。大学生アスリートは、アスリートとしてのキャリアを歩むことが難しいと分かるまで他のキャリアに関心を向けないことが指摘されている (Ferrera et al., 2017)。

本レビューにおいても、大学生アスリートの競技および学業の忙しさに鑑み練習や試合の日程と調整しやすいように、強制ではなく任意の出席として実施した場合、2回以上出席した学生アスリートは約30%とされている (Murdock et al., 2016)。その他の方法として、単位取得にも繋がる大学の講義の一環として実施 (Stankovich et al., 2001)、または大学生アスリートがプログラムの受講やカウンセリングを受けることを義務付けられている場合 (Burns et al., 2013; Shurts and Shoffner, 2004) があるものの、大学生アスリートが自発的に参加して効果が確認されたものはなかった。大学生アスリートに対して介入を実施する場合、回数・時間と内容の兼ね合いも含め全ての大学生アスリートが参加しやすいような研究デザイン (Murdock et al., 2016; Hansen et al., 2019) が求められている。近年、シングルケース実験デザインなども再評価されるようになり、介入・支援の検証方法も拡充しつつある (竹林, 2021)。今後は、大学生アスリートが参加しやすく、かつ検証可能な形で介入・支援を進めていくことが重要と考えられる。

大学生アスリートに対するキャリア移行に関わる支援・介入に関する考察

ここまで大学生アスリートに対するキャリア移行に関わる支援・介入について回数に基づいて研究を分けて記述した。研究数および記述の少なさから一定の限界はあり、介入内容がそれぞれ関連し合っているため明確に分類することは難しいものの、今後のキャリア支援内容・方略の立案の一助となるように、それぞれの研究で実施された介入の共通項、構成要素についてまとめる。介入の共通項、構成要素には、(1) 自身の価値観や興味・関心を明確にすること、(2) 持っているスキル、強み、競技で培ったトランスファラブルスキルを明確にすること、(3) 仕事・職業に関する情報提供または情報収集、(4) 自身の価値観、興味・関心をさらに拡大させ、新しい領域に目を向けさせること、(5) (1) から (4) を踏まえて、労働市場との繋がりを考える・具体的なキャリアプランを立てること、(6) 具体的なキャリア移行に関わる支援であった。

具体的な手法について、(1)には、キャリアまたは職業に関する理想的な将来を想像する (Nelson, 1982)、人生の意味を考える (Peng and Johanson, 2006) 方法があった。一方で “Exploring identity, values, personality, and interests” (Stankovich, 2001) とのみ記述する研究もみられている。(2)には、質問紙への回答から強みについて理解する (Van Raalte et al., 2017)、高校などで学業的、競技的に達成したことを振り返る (Nelson, 1982)、トランスファラブルスキルを学ぶ (Stankovich, 2001) 方法が取られていた。(3)には、ワークショップや講義での卒後の進路に関する情報提供 (Murdock et al., 2016)、働く人・仕事に関してインタビューをする (Peng and Johanson, 2006 ; Stankovich, 2001)、15の活動領域からキャリアに関するコンピテンシーの理解を促進する (Nelson, 1982) 方法が取られていた。(4)には、質問紙やアセスメントの結果に対して「スキル、興味、性格特性などが自分が思うよりも低かった項目はありますか、違って欲しいと思う項目はありますか」と質問したり、「これまで考える機会の少なかった領域で興味のある領域はありますか」といった質問を投げかける (Shurts and Shoffner, 2004)、重要な他者の意見を取り入れる (Nelson, 1982)、グループディスカッション (Peng and Johanson, 2006) などの方法がみられた。(5)には、ワークショップや講義によって、競技後の生活のキャリアプランニング・キャリア探索を行う (Burns et al., 2013 ; Murdock et al., 2016 ; Stankovich, 2001)、自身の強みやスポーツの経験を振り返りキャリアと結びつける (Van Raalte et al., 2017) 方法が取られている。(6)では、履歴書作成、インターンシップ (Burns et al., 2013 ; Stankovich, 2001) が含まれていた。これらの手法は必ずしも新しい方法ではなく、(トップ)アスリートに対するキャリア支援や運動部に所属していない(一般的な)大学生を対象にした支援においても実施されてきた (プティパほか, 2005 ; Spokane and Nguyen, 2016 ; Stambulova, 2012)。キャリアに関する介入のメタ分析を行った Whiston et al. (2017) において、価値の明確化 (Values clarification : (1)と関連)、自己記入式の質問紙 (Self-report inventories : (2), (4)と関連)、職業に関する情報および職業探索 (World of work information, Vocational exploration : (3)と関連) など、本レビューで分類した介入の構成要

素と関連した介入方法が実施されており、それぞれ効果があると述べられている。また、アスリートへのキャリア支援においては、トランスファラブルスキルについて認識することや競技経験を振り返ることの重要性も指摘されている (Matsangos et al., 2019 ; Subijana et al., 2022 : (2), (5)と関連)。このことから、大学生アスリートに対するキャリア支援は (トップ) アスリートへのキャリア支援と (一般的な) 学生へのキャリア支援の方法の双方の影響を受けながら発展していると考えられる。これまでのアスリートに対するキャリア支援の研究は、子ども時代からトップアスリートまで含んでおり、その対象者の広さから支援する際の視点や方針を整理するに留まっており (Stambulova, 2012 ; Wylleman et al., 2004), 特定の年齢や発達段階に応じた具体的な支援・介入方法について包括的に検証を行った研究は少ない。さらに、それぞれの構成要素に分けて検証しているわけではなく、全体のパッケージとして効果を検証しており、それぞれの介入の効果についての検証はされていない。キャリア支援に関する研究においては、統一的な介入のパッケージやマニュアル化されていないため、介入効果の検証や研究間の比較が非常に難しいことが指摘されている (Spokane and Nguyen, 2016)。そのため、今後は本研究で示した (1) から (6) の構成要素について、それぞれの機能および関係性を明らかにし、介入の効果を検証することで、よりデータに基づく支援が可能になると言えるだろう。ただし、先行研究において指摘されている介入の内容・方法で、本研究でみられなかったものもある (例：心理教育、モデリング (Whiston et al., 2017) などは本レビューの文献では直接的に言及されていない)。アスリートおよび学生の双方で明らかにされた支援方法や知見を取り入れながら、介入の構成要素の検証を継続することが重要である。

また、本レビューでは競技の離脱や継続に関連する介入を行った研究はみられなかった。大学生アスリートのキャリア移行の重要な要因として、競技者アイデンティティが重要な要因として取り上げられることも多い (Kornspan, 2014 ; Sum et al., 2017)。競技以外のキャリアへ移行を主目的とした研究を取り上げたため、必ずしも含まれる必要があるわけではないが、競技の離脱や継続に関連した介入 (例：競技からの離脱 : Hansen et al., 2019 ;

競技スポーツから生涯スポーツへの移行：Reifsteck and Brooks, 2018)などは、現時点では異なる文脈で検討されている。競技からの引退時の困難への対処および競技の継続方法についての支援も重要であり（文部科学省，2019），アスリートとしてのキャリアか，アスリート以外のキャリアかといった二者択一的な支援のみならず，その中間を含む支援も拡充することで，より効果的なキャリア移行支援を実施することができると考えられる。

第3章 大学生アスリートのキャリアに対する考え方・障壁・対処法

第1節 目的

大学生アスリートの卒業後の進路には、競技の継続や競技と学業の継続、競技以外のキャリアへの移行など、いくつかの選択肢がある一方で、大学生アスリートが競技者としてのキャリアを考える際に直面する問題や課題について含めて彼らのキャリア移行の経験を検討した研究はほとんどみられていない。また、本邦における大学生アスリートのキャリアに関する研究はライフスキルおよびデュアルキャリアに焦点が当てられており、彼らのキャリア移行について調査した研究は未だ少ないと考えられる。そこで、本章では、大学生アスリートを対象に半構造化インタビューを用いて、彼らのキャリアの移行の経験について明らかにすることを目的とした。具体的には、彼らがどのようなキャリアを考え、どのような困難に直面し、それらの困難にどのように対処しているかを検討した。

第2節 方法

募集手続きおよび調査対象者

四年制大学の運動部活動に所属する大学生アスリートに対して、運動部活動のコーチを通じて研究概要が伝えられた。その後、関心を持った大学生アスリートは研究実施者と連絡を取り研究へ参加した。なお、一部の対象者は、他の調査対象者から紹介されて参加した。本論文の目的と照らして調査対象者の競技レベルを一定とするために (a)大学の運動部活動に所属し、(b)全国大会出場以上の競技レベルを持つことを条件とした。

調査対象者は、関東地方のある四年制大学の運動部活動に所属する12名の大学生アスリート（男性6人、女性6人；平均年齢 20.25 ± 0.92 歳）であった。競技レベルは、8名が全国大会出場レベル、4名が国際大会出場レベルであり、専門競技は、サッカー、ソフトボール、およびウエイトリフティングであった。インタビュー調査は2021年11月から2022年2月まで実施され、インタビュー実施時点で、対象者のうち1名が卒業後の進路を決定していた。

インタビュー調査

インタビュー調査は半構造化面接を用いて実施され、一人あたり約 50 分程度実施された。インタビュー実施前に先行研究に基づいてインタビュープロトコルを作成し (Sum et al., 2017), 「卒業後の進路についてどのように考えていますか?」, 「キャリアについて考えたり選択する際にサポートや援助を受けましたか?」, 「キャリアについて考えたり選んだりする際に困難や問題がありましたか?」などの質問項目を設定した。インタビューは、臨床心理学領域に関する修士号を持ち、臨床心理士・公認心理師としての資格を持つ研究実施者によって実施された。

データ分析

得られたインタビューデータについて文字起こしを行い、逐語録を作成した。分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA; Cobin and Strauss, 2008; 戈木クレイグヒル, 2017) を参考に実施した。最初に、逐語録を 1~2 文程度に区切りラベルを作成した。このラベルは、プロパティとディメンションを基に設定した。その後、類似するラベルをまとめ、カテゴリを作成した。カテゴリ間の関係を表現するために図を作成し、最終的に大学生アスリートのキャリア体験を表現する理論を生成した。分析結果の妥当性を検討するために、スポーツ科学を専攻する大学院生 5 名とスポーツ心理学を専門とする大学教授 1 名と内容について確認を行った。

倫理的配慮

インタビュー実施前に、研究への参加は任意であり監督・コーチや大学からの強制ではないこと、答えたくない質問に答える必要はないこと、研究データの使用範囲等について口頭および文書にて説明を行い、同意した対象者のみが研究へ参加した。なお、この研究は早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会によって承認されている (承認番号: 2021-086)。

第 3 節 結果と考察

インタビューの結果、大学生アスリートは主に三つキャリアに関する考え方 (競技者としてのキャリアを追求する、競技者としてのキャリアと他のキャリアの選択肢を持つ、競技者以外

のキャリアを追求する)を持ち、それぞれの考え方に対する障壁があることが明らかとなった。これらのキャリアに対する考え方は、先行研究 (Ryba et al., 2017) と類似する結果であるといえ、日本においても欧米におけるデュアルキャリアに関する考え方について浸透しつつあることが窺えた。一方で、本邦の学生のキャリアに対する考え方の特徴として、競技者または競技者以外の二者択一的な考え方を持つこと、大学卒業後に競技と学業の継続や競技と仕事の両立などの考え方は示されず、先行研究で示された多様なキャリアパスの確立なども重要と考えられた (Vickers and Morris, 2022)。

また、本研究では、上記のキャリアに対する考え方から生じる困難および対処方法についてのモデルを提案した。先行研究と異なる特徴として、競技者としてのキャリアについての考えとそれに伴う障壁を扱った点が挙げられる。これまでは、競技者以外のキャリアへの移行における問題 (例えば、競技以外にやりたいことが見つからない、向いている職業が分からないなど) について指摘しているが (Sum et al., 2017)、競技者としてのキャリアについても含めて検討した研究は少ない。本研究により、大学生アスリートに対して実態に即したキャリアに対する考え方とそれに付随する困難を提示すると同時に、競技者としてのキャリアと競技者以外のキャリアにおける考えの揺れ動き (例えば、競技以外のことを考えるとアスリートになることが難しくなるかもしれないといった考え) についても捉えることができた。今後は、本研究で明らかとなった内容に関してアセスメントを実施すること (例えば、現在将来のキャリアに対してどのように考えており、どのような点で困難があり、どのような対処方法を取っていて、どのような環境に身を置いているかを総合的に検討する) で、大学生アスリートが必要な支援を提供することができると考えられた。

本研究の限界として、それぞれの内容の中で重要な要因を明らかにすることができなかった点が挙げられる。例えば、大学生アスリートにとって障壁の中でも特に解決すべきものが何か、どのような対処方法やサポート資源を持つことが重要かは明らかにすることは出来ていないため、今後は、量的研究などを通じて要因の特定をすることが期待された。

※ なお，本章は著作権により概要のみを記載している．本章の論文については，添付資料 1 を参照．

第4章 大学生アスリートのキャリア困難感についての測定尺度の整備

第1節 目的

本章では、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度を開発し、その信頼性・妥当性の検討を行った。具体的には、先行研究で指摘されている競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難だけではなく、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難を含めた尺度を作成した。なお、本研究における困難は、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリアのそれぞれについて考えることや選択することを妨げるような、困っている感覚、負担感、どうしたら良いか分からない状態を指すこととする。そのため、キャリアを考え選択することを妨げるものとして機能すると想定し、大学生アスリート全体に適応可能であると考えている。

なお、本章は、2つの調査から成り立ち、調査1では、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度の項目の選定と因子構造の検討、内的整合性の検討、基準関連妥当性（キャリア成熟度・競技レベル）の検討を行った。調査2では、調査1にて示された項目群を用いて、基準関連妥当性（競技者アイデンティティ）、構成概念妥当性、再検査信頼性の検討を行った。

第2節 調査1：大学生アスリートのキャリア困難感尺度の作成と内的整合性・基準関連妥当性の検討

調査手続きおよび調査対象者

2022年4月～2022年11月に、関東にある四年制大学3校より調査協力を得た。研究実施者が直接または運動部活動の指導者に対して研究の説明を行い指導者を通して、紙のアンケートを配布した。運動部活動に所属する1年生～4年生の大学生アスリート237名から調査の協力を得た。因子構造の検討の際に記入漏れ・不備があった回答（21名）を除き、216名（男性113名、女性99名、不明4名；平均年齢 19.88 ± 1.28 歳）を分析対象者とした。その後、妥当性の検討においては、記入漏れ・不備のあった回答（4名）を除き212名（男性111名、

女性 97 名，不明 4 名；平均年齢 19.88 ± 1.29 歳）が分析対象者となった。

調査項目

調査項目はデモグラフィックデータ，大学生アスリートのキャリア困難感尺度（インタビュー調査（Namiki and Horino, 2023）および先行研究（Ryba et al., 2017; Sum et al., 2017; Tokuyama, 2015）を基に，作成した 28 項目），基準関連妥当性を検討するための既存尺度（キャリアレディネス尺度短縮版；坂柳, 2019，競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度；上野・小塩, 2015）で構成された。

倫理的配慮

調査実施前に，研究者または指導者から回答には自由意志が尊重され回答しないことで不利益を受けることはないこと，調査は匿名で実施するものであり回答内容が特定されることはないこと，回答の提出をもって同意とみなすこと等を口頭にて説明し，アンケート冊子にも記載して実施した。なお本研究は，調査 1 および調査 2 ともに早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2021_459）。

調査 1 の結果

大学生アスリートのキャリア困難感尺度の原案 28 項目において天井効果・床効果を確認し，平均値 ± 1 標準偏差の得点範囲を超えた 9 項目を削除した。項目分析にて削除された 10 項目を除く 18 項目について探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い，固有値 1 以上を基準として 3 因子構造を採用した。因子負荷量が .35 を下回る項目を削除して分析を行った結果，16 項目が抽出された。第一因子は『競技者以外のキャリアに対する困難』，第二因子は『競技者としてのキャリアを追求することの困難』，第三因子は『競技者引退後のキャリア・生活への困難』と命名された。内的整合性について，Cronbach の α 係数を算出したところ，困難感尺度合計点および各下位因子にて $\alpha = .79 \sim .88$ であった。

基準関連妥当性の検討のため，困難感尺度の合計点・各下位因子とキャリアレディネス尺度短縮版および競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度で Pearson の積率相関係数を算出した結果，キャリアレディネス尺度短縮版においては，第一因子（競技者以外のキャリアに

対する困難), 第三因子 (競技者引退後のキャリア・生活への困難), および困難感尺度合計点においてそれぞれ有意に弱い負の相関であり, 競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度では, 第二因子 (競技者としてのキャリアを追求することの困難) と有意に弱い負の相関がみられた.

第3節 調査2: 大学生アスリートのキャリア困難感尺度の基準関連妥当性・再検査信頼性の検討

調査手続きおよび調査対象者

2023年3月にオンライン調査会社を通じて Web にてアンケートを配布した. 調査会社の保有するパネルのうち 5000 名を対象に, 4 年制大学に所属し, 体育会運動部に所属する 1~4 年生が回答者となるように対象者への質問を行ったところ 270 名が該当した. 次いで, 270 名に対しアンケートへの協力を依頼し 240 名から回答を得た. 240 名のうち, 回答を指定する質問を設定し (例: この質問には「2.あまり当てはまらない」を選択してください), 適切に回答できなかった対象者を分析から除外したところ, 174 名 (男性 57 名, 女性 117 名, 平均年齢 19.89 ± 1.14 歳) が分析対象者となった.

再検査信頼性の検討では, 上記の 174 名のうち 2023 年 4 月 (1 か月後) に大学生アスリートのキャリア困難感尺度を再度測定し, 121 名から回答を得た. 回答を指定する質問に適切に回答できなかった 13 名を除外し, 108 名 (男性 36 名, 女性 72 名, 平均年齢 19.79 ± 1.13 歳) が分析対象者となった.

調査項目

調査項目はデモグラフィックデータ, 大学生アスリートのキャリア困難感尺度, 基準関連妥当性の検討のための既存尺度 (日本語版学生競技者アイデンティティ尺度; 萩原ほか, 2020) を用いた.

調査2の結果

再検査信頼性について, 級内相関係数を算出した結果, 困難感尺度合計点および各下位因子

にて $r = .69 \sim .77$ であった。基準関連妥当性の検討のため、困難感尺度と競技者アイデンティティについて Pearson の積率相関係数を算出した結果、困難感尺度合計点および下位因子で、それぞれ有意に弱い～中程度の正の相関関係がみられた。困難尺度の因子構造について、確認的因子分析を行った結果、適合度は $GFI = .90$, $AGFI = .85$, $CFI = .96$, $RMSEA = .07$ であった。なお、分析にあたり先行研究（尾野・岡田, 2014; 董ほか, 2019）を踏まえ、修正指数が 4 以上を示した誤差変数の共分散のうち異なる因子間をまたぐものは避け、「競技者以外のキャリアに対する困難」因子内に 3 箇所、「競技者としてのキャリアを追求することの困難」因子内に 5 箇所の共分散を設定している。

第 4 節 考察

大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度を開発し信頼性・妥当性を検討した。尺度は 3 因子構造 16 項目から成ることが明らかになった。また、調査 1 および調査 2 を通して本尺度は、一定の信頼性（内的整合性、再検査信頼性）、妥当性（基準関連妥当性、構成概念妥当性）が確認されたと考えられた。項目の内容的側面から、第一因子（競技者以外のキャリアに対する困難）が競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難であると考えられ、第二因子（競技者としてのキャリアを追求することの困難）および第三因子（競技引退後のキャリア・生活への困難）が競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難と考えられた。先行研究で示されている通り大学生アスリートは競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアに付随する困難を抱えていることが示された（Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017）。

基準関連妥当性を検討した尺度の結果から検討を行った。まず、キャリア成熟度が第一因子および第三因子との関連がみられたことから、キャリアや進路を考え準備することを通して競技者以外のキャリアを検討するだけでなく、競技者を引退した後のキャリアや生活もイメージしていることが推察された。一方で、キャリア成熟度は第二因子とは関連がみられず競技パフォーマンスとの関連がみられていることから、大学生アスリートは、競技者としてのキ

キャリアを追求することに関して将来やキャリアを考え計画を立てて取り組むことよりも、現在の自身の状態や置かれている環境を踏まえて判断を下していることが考えられた (Jewett et al., 2019)。さらに、すべての因子が競技者アイデンティティとの関連を示しており、競技者アイデンティティが高い大学生アスリートは、競技活動のみに集中してしまうことで自身の将来に対して競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリア問わず全体的に困難を抱えてしまう可能性について指摘した。

今後は、本尺度を用いたキャリア支援への適応が期待される。特に、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難については本研究独自の視点といえる。競技者以外のキャリアへの準備や支援のみならず、競技者のキャリアに関する困難も含めて、それぞれへの対応の必要性について指摘した。

※ なお、本章は著作権により概要のみを記載している。本章の論文については、添付資料 2 を参照。

第 5 章 総合討議

第 1 節 本論文において得られた知見

本論文の目的は、大学生アスリートのキャリア移行に関して競技者としてのキャリアも含めて検討を行うことであった。これまで、大学生アスリートのキャリアの研究では、競技者以外のキャリアを想定して彼らのキャリアに関する体験を記述し、競技者以外のキャリアへの移行の促進・阻害要因を検討してきた。しかしながら、彼らのキャリア移行に関する支援・介入についての現状や支援内容についてはあまり整理されてこなかった。そこで、第 2 章において、大学生アスリートのキャリア移行に関する支援・介入研究の現状および支援内容について整理した。また、大学生アスリートは競技者としてのキャリアも含めてキャリアを検討していることを踏まえると、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリアのどちらか一方からの視点での整理は不十分と考えられた。第 3 章および第 4 章を通じて、競技者としてのキャリアを含めて彼らのキャリア移行の経験を記述・検討した。

第 2 章（文献レビュー）から得られた知見

第 2 章では、大学生アスリートに対するキャリア移行を促す支援に関する文献レビューを行い、具体的な支援内容について検討を行った。国内外のデータベースで文献検索を行い、最終的に 7 件の文献が分析対象となった。現時点で、理論的背景、研究デザイン、アウトカムにバラつきがみられ、頑健なデータは得られていないことが明らかとなった。大学生アスリートのキャリア支援は多岐にわたり、かつ彼らのキャリア移行に関する測定指標について研究者間で一致していないことが窺えた。また、それぞれの文献で提示された支援内容の共通要素を検討し大きく 6 つを提案した。それは (1) 自身の価値観や興味・関心を明確にすること、(2) 競技で培ったスキル、強み、トランスファラブルスキルを明確にすること、(3) 仕事・職業に関する情報提供または情報収集、(4) 自身の価値観、興味・関心をさらに拡大させ、新しい領域に目を向けさせること、(5) (1) ~ (4) を踏まえて、労働市場との繋がりを考える・具体的なキャリアプランを立てること、(6) 一般的なキャリア移行に関わる支援であった。これらの

支援はアスリートに対するキャリア支援や運動部に所属していない（一般的な）大学生を対象にした支援においても実施されており（プティバほか，2005；Spokane and Nguyen, 2016；Stambulova, 2012），双方の影響を受けていることが推察された。

また，先行研究では，競技の離脱や継続に関連した介入（例：競技からの離脱：Hansen et al., 2019；競技スポーツから生涯スポーツへの移行：Reifsteck and Brooks, 2018）や，競技で培ったスキル・強みなどを明確化する（Nelson, 1982; Stankovich, 2001）など，競技に関連する支援方法はみられるものの，競技者としてのキャリアへの移行については一部記述的な検討のみ（Morris et al., 2017）であった（なお，この研究においてはサッカーのユース選手の昇格者を対象とし，トップチームへの適応に焦点がおかれている．そのため競技者としてのキャリアへの考えや問題については検討されていない）．以上を踏まえると，大学生アスリートのキャリア移行に関する支援は，競技者以外のキャリアへの移行を前提として検討されており一般的な大学生への支援と類似していること，競技者としてのキャリアへの支援方法については現時点では研究数も少なく未確立であると推察された。

第3章（インタビュー調査）で得られた知見

第3章では，大学生アスリートのキャリア移行の経験について，半構造化面接を用いて明らかにした．分析の結果，大学生アスリートは，先行研究と同様に（Ryba et al., 2017）キャリアに対して主に3つの考え方とそれに付随する障壁および対処方法を取っていることが明らかになった．本邦においてもデュアルキャリアに関する考え方が浸透しつつあることが窺えた．また，本邦の学生のキャリアに対する考え方の特徴として，競技者または競技者以外の二者択一的な考え方を持つこと，大学卒業後に競技と学業の継続や競技と仕事の両立などの考え方は示されず，先行研究で示された多様なキャリアパスの確立についても指摘した（Vickers and Morris, 2022）．

また，競技者としてのキャリアについての考えとそれに伴う障壁も含めたモデルを提案したことで，大学生アスリートへのキャリアに対する考え・態度についてより実態に即した理解

が促進されると同時に、競技者としてのキャリアと競技者以外のキャリアにおける考えの揺れ動きについても捉えることができると考えられた。今後は、本論文で明らかとなった内容に関してアセスメントを実施すること（例えば、現在将来のキャリアに対してどのように考えており、どのような点で障壁があり、どのような対処方法を取っていて、どのような環境に身を置いているかを総合的に検討する）で、大学生アスリートが必要な支援を提供できると考えられる。

しかしながら、本章では、大学生アスリートのキャリアにおいて重要な要因について明らかにすることはできなかった。例えば、大学生アスリートにとって障壁の中でも特に解決すべきものが何か、どのような対処方法やサポート資源を持つことが重要かは明らかにすることは出来ていない。そのため、第4にて、彼らの抱える困難の構成概念や取り組むべき内容について検討を行った。

第4章（尺度作成）で得られた知見

第4章では、先行研究において検討されている競技者以外のキャリアにおける困難のみならず、競技者としてキャリアを考える際に経験する困難についても含めた大学生アスリートのキャリア困難感を測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性を検証した。

調査1では、関東にある四年制大学3校より体育会運動部に所属する216名（平均年齢19.88歳±1.28）より回答を得た。インタビュー調査と先行研究を基に原案28項目を作成し、項目分析（天井効果・床効果、I-T相関分析）およびプロマックス回転を用いた探索的因子分析を行った結果、①競技者以外のキャリアに対する困難、②競技者としてのキャリアを追求することの困難、③競技者引退後のキャリア・生活に対する困難の3因子構造16項目が得られた。基準関連妥当性の検証のため相関分析を行ったところ、②競技者としてのキャリアを追求することの困難と、競技パフォーマンスの自己評価に弱い負の相関、①競技以外のキャリアに対する困難および③競技者引退後のキャリア・生活に対する困難と、キャリア成熟度に弱い負の相関が得られた。

調査 2 では、オンライン調査会社を通じて Web にてアンケートを配布し適切な回答を得た 174 名（平均年齢 19.89 ± 1.14 歳）が分析対象となった。基準関連妥当性の検証のため競技者アイデンティティと相関分析を行ったところ、いずれの因子も弱い正の相関が得られた。再検査信頼性について、2 時点で測定した困難感尺度の級内相関係数は $r = .69 \sim .77$ であった。調査 1 および調査 2 の困難感尺度の Cronbach の α 係数は、 $\alpha = .79 \sim .92$ であった。また、調査 1 にて得られた因子構造について確認的因子分析を行ったところ、概ね満足できるモデル適合度が得られた。以上を踏まえ、困難感尺度には一定の信頼性・妥当性が得られたと考えられた。

大学生アスリートの抱えるキャリア困難感について、競技者としてのキャリアに関連する内容（第二因子；競技者としてのキャリアを追求することの困難、三因子；競技者引退後のキャリア・生活に対する困難）、競技者以外のキャリアに関する内容（第一因子；競技者以外のキャリアに対する困難）を抱えていることが明らかになった。基準関連妥当性の検討において、競技者としてのキャリアを追求することの困難（第二因子）は、競技パフォーマンスの自己評価と弱い負の相関がみられた一方で、キャリア成熟との関連は示さなかった。このことは、大学生アスリートは、競技者としてのキャリアを追求することに関して将来やキャリアを考え計画を立てて取り組むことよりも、現在の自身の状態や置かれている環境を踏まえて判断を下していると考えられた。

また、競技者以外のキャリアに対する困難（第一因子）および競技者引退後のキャリア・生活に対する困難（第三因子）は、どちらもキャリア成熟と弱い負の相関がみられている。このことは、キャリアや進路を考え準備することを通して競技以外のキャリアを検討するだけでなく、競技者を引退した後のキャリアや生活もイメージしていると推察された。

さらに、競技者アイデンティティと各因子に弱い正の相関がみられたことから、競技者アイデンティティが高い場合、競技活動のみに集中することにより、競技者以外のキャリアのみならず競技者としてのキャリアを考え選択することさえも妨害されてしまう可能性があると考えられた。そのため、大学生アスリートは競技者アイデンティティが高い場合に、将来の職業選択やキャリアに関して（競技者、競技者以外問わず）困難を感じてしまいやすい可能性がある

り、彼らへの支援方法について今後検討する必要があるといえた。

第2節 大学生アスリートへのキャリア支援に対する示唆

大学生アスリートのキャリア支援は、これまで競技者以外のキャリアへの移行を前提に実施されてきた。第2章において、競技者以外のキャリアへの移行を対象とした支援・介入について整理を行い、研究の現状について提示し支援内容について整理を試みた。本論文にて明らかになった6つの要素に基づいて支援方法が展開されており、これらの支援に関連する内容について効果測定を行うことで、より効果的なキャリア支援を実施することに繋がると考えられる。さらに、この6つの要素はキャリア探索理論 (Stumpf et al., 1983) の考え方に基づいて検討することが可能といえる。キャリア探索理論では自己探索 (自分の人生や強みについての理解を深め、自己を探索すること) および環境探索 (職業等の情報収集により新たな環境の探索を行うこと) により、キャリアへの準備が進められることを提案している (Tarver, 2020)。このことを踏まえると、第2章において提案した6つの要素のうち、(1) 自身の価値観や興味・関心を明確にすること、(2) 競技で培ったスキル、強み、トランスファラブルスキルを明確にすることが、自己探索にあたり、(3) 仕事・職業に関する情報提供または情報収集、(4) 自身の価値観、興味・関心をさらに拡大させ、新しい領域に目を向けさせることは、環境探索といえる。さらに (5) (1) ~ (4) を踏まえて、労働市場との繋がりを考える・具体的なキャリアプランを立てること、(6) 一般的なキャリア移行に関わる支援は、自己探索と環境探索の組み合わせといえ、それぞれへのアプローチを行っていることが推察される。

また、第3章、第4章にて、これまでのキャリア支援においては検討されてこなかった競技者としてのキャリアも踏まえて大学生アスリートのキャリア移行に関する経験を記述し、彼らの抱える困難についての明らかにした。具体的には第3章において、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリアに関連する障壁を提示し、第4章において、大学生アスリートのキャリア困難感尺度を作成した。尺度において、競技者以外のキャリアに対する困難、競技者としてのキャリアを追求することの困難、競技者引退後のキャリア・生活への困難の3因子が

あることが明らかとなった。これにより、第3章にて提示した障壁や先行研究の中でも、支援において考慮すべき主要な困難を特定することが出来たと考えている。特に、競技者としてのキャリアに関連する困難について2因子が抽出されたことから、これらの因子について念頭におきながら支援に当たることが重要と考えられる。以下では、競技者としてのキャリアを従来のキャリア支援に組み込む方法について提案を行った。

第4章において、競技者引退後のキャリア・生活に対する困難はキャリア成熟と弱い負の相関がみられており、キャリアや進路を考え準備することを通して競技者以外のキャリアを検討するだけでなく、競技者を引退した後のキャリアや生活もイメージしていることが推察された。そのため、この因子についてはこれまで実施されてきたキャリア移行に関する支援（競技者以外のキャリア移行を促す支援）が、全く機能しないわけではないと考えられる。つまり、第2章にて検討した大学生アスリートのキャリア移行支援の内容の支援を行うことによって、競技者としてのキャリアに対する考えや困難に対しても一定の効果が生じることが期待される。また、5回以下の支援・介入であっても大学生アスリートがキャリア移行支援に参加しやすいような設定（Peng and Johanson, 2006; Nelson, 198; Van Raalte et al., 2017）や、6回以上の支援介入の場合には授業や講義の一環として実施すること（Burns et al., 2013; Murdock et al., 2016; Stankovich et al., 2001）などについても応用可能と考える。支援・介入の内容だけでなく、支援者・支援機関の状況に応じて大学生アスリートが参加しやすい環境を設定し、キャリア移行支援を実施していくことが重要と考えられる。

一方で、競技者としてのキャリアを追求することの困難についての支援方法については、さらなる関連要因の検討が必要といえる。第3章でのインタビュー調査において、競技者としてのキャリアや引退後の生活に関する情報は実際に経験のある人（指導者や競技者になった先輩・友人）への相談によって対処しており、これは先述のキャリア探索理論における環境探索（競技者としての職業情報の収集）にあたりと考えられる。さらに第4章においては、競技パフォーマンスの自己評価と弱い相関がみられていることから、大学生アスリートは競技者としてのキャリアに追求にあたって現在の自身の状態や置かれている環境を踏まえて判断を下して

いると考えられた。これらのことを踏まえると、競技者としてのキャリアにおいて自己探索に対する支援や方法の確立が必要であると推察される。具体的には、競技者として自分自身の強みや大切にしている価値観を明確化する方法について検討することが重要と考えられる。現在、大学生アスリートに限らずスポーツに取り組む人が自身の強みを理解する方法については選手個人や指導者に委ねられている。つまり、個人内の暗黙知として理解されているものが多く、その方法については関係者内でしか広まっていない。そのため、今後は本人および取り巻く関係者（親、兄弟、チームメイト、コーチ・監督など）が競技者としての強みについてどのように明確化しているのかインタビュー調査を実施することや、大学生アスリート自身などのような人に対してサポートを求め、またそれが効果的なのかについてアンケート調査などを行うことで、競技者になることについての困難への支援方法が明らかになるといえる。

また、競技者としてのキャリアを既存の支援に組み込むことで、大学生アスリートのうち、特にキャリアへの関心が低い層への支援に繋げることが期待される。つまり、競技者としてのキャリアを考える方法（競技者としての強みを理解する自己探索、関係者への相談や引退後の生活についての情報提供などによる環境探索）について支援を行うことは、競技のみに傾倒するアスリートにとっても関心のある内容と考えられ、彼らへの早期（例えば、大学1～2年生等の大学卒業まで数年の期間のある時期）の支援に繋げることが出来ると考えられる。これまでは、競技者以外のキャリアへの支援が中心に行われ、キャリアに関心の低い層へのアプローチ方法が常に模索されてきた。支援者・支援機関にとっては、競技者としてのキャリアを考える方法を提案し、継続的に関わりながら競技者以外のキャリアについてアプローチする機会も窺うことが重要といえる。

第3節 本論文の課題と今後の展望

本章では、得られた知見を基に競技者としてのキャリアを既存のキャリア支援に組み込む方法について仮説的に提案を行った。その一方で、以下の点で課題があると考えられる。一つ目は、現場の指導者等の関係者のニーズについて検証ができていない点である。具体的には、

競技者としてのキャリアをどのように考え、支援しているのか（あるいはしていないのか）、どのような支援が望ましいのかについて検討できていない。本論文では、競技者としての強みを明確化することや、競技者の職業情報の収集について提案を行ったものの、より具体的かつ受け入れやすい支援内容を明らかにしていくことが望まれる。

二つ目は競技で得られた知見がどの程度、競技者以外のキャリアに影響するのかについては検証ができていない点である。先行研究では、ライフスキルの般化について検討を行った研究がみられるものの（藪内，2022）、競技を通じて獲得した様々なスキル・能力がキャリアの観点においても応用できるのかは不明瞭であるといえる。本論文で提案したキャリア探索理論に基づく自己探索・環境探索の手法は有効であることが推察されるものの、実際に競技での強みや職業情報についての収集が、競技者以外のキャリアを考える場面においてどの程度般化するのかについては不透明といえる。今後は、競技場面での強みや職業情報の収集についての経験と、競技者以外のキャリアへの転換について縦断的に調査を行うことが望まれる。

引用文献（*印は第2章のレビューで分析対象となった文献を示す）

- 阿部拓真・木村和彦・醍醐笑部・作野誠一（2021）アスリート・キャリアに関する国内研究の動向と課題：スコーピング・レビューを通じて．*体育・スポーツ経営学研究*, 34: 1-23.
- 安達智子（2001）大学生の進路発達過程：社会・認知的進化理論からの検討．*教育心理学研究*, 49(3) : 326-335.
- 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介（2018）大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関連する要因—デュアルキャリアの実現に向けて—．*スポーツ産業学研究*, 28: 149-161.
- Brown, D., Fletcher, D., Henry, I., Borrie, A., Emmett, J., Buzza, A., and Wombwell, S. (2015) A British university case study of the transitional experiences of student-athletes. *Psychology of Sport and Exercise*, 21: 78-90.
- *Burns, G. Jasinski, D., Dunn, S., and Fletcher, D. (2013) Academic support services and career decision-making self-efficacy in student athletes. *Career Development Quarterly*, 61: 161-167.
- Cartigny, E., Fletcher, D., Coupland, C., and Taylor, G. (2021) Mind the gap: A grounded theory of dual career pathways in sport, *Journal of Applied Sport Psychology*, 33(3): 280-301. DOI: 10.1080/10413200.2019.1654559
- Chung-Ju, H., Chou, C., and Tsung-Min Hung. (2016) College experiences and career barriers among semi-professional student-athletes. *Career Development International*, 21(6): 571-586. DOI: 10.1108/CDI-09-2015-0127
- Cobin, J. and Strauss, A. (2008) Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory (3rd ed.), SAGE, pp.159-194, DOI: 10.4135/9781452230153.n8
- Cox, R., Sadberry, S., McGuire, R., and McBride, A. (2009) Predicting student athlete career situation awareness from college experiences. *Journal of Clinical Sport Psychology*, 3(2):

156–181. DOI: 10.1123/jcsp.3.2.156

Danish, S., Petitpas, A., and Hale, B. (1992) A developmental-educational intervention model of sport psychology. *The Sport Psychologist*, 6(4): 403–415.

董潔・松原耕平・佐藤寛 (2019) 大学生の就職活動不安に与える認知行動的要因の影響. *不安症研究*, 11(1) : 59–69.

EU expert group on “education and training in sport” (2012) EU guidelines on dual careers of athletes: Recommended policy actions in support of dual careers in high-performance sport. https://ec.europa.eu/assets/eac/sport/library/documents/dual-career-guidelines-final_en.pdf, (参照日 2023 年 10 月 18 日).

Gouttebauge, V., Aoki, H., Verhagen, E., and Kerkhoffs, G. (2016) Are level of education and employment related to symptoms of common mental disorders in current and retired professional footballers?. *Asian Journal of Sports Medicine*, 7(2): e28447.

Guidotti, F., Cortis, C., and Capranica, L. (2015) Dual career of European student-athletes: A systematic literature review. *Kinesiologia Slovenica*, 21 (3): 5-20.

萩原悟一・YUKHYMENKO–LESCROART, M.・下園博信・磯貝浩久・秋山大輔・神力亮太・大下和茂・萩原裕子 (2020) 日本語版学生競技者アイデンティティ尺度 (AAIS-J) の作成. *スポーツ産業学研究*, 30 (2) : 183-193.

Hansen, A., Perry, J., Ross, M., and Montgomery, T. (2019) Facilitating a successful transition out of sport: Introduction of a collegiate student-athlete workshop, *Journal of Sport Psychology in Action*, 10 (1):1-9. DOI: 10.1080/21520704.2018.1463329

Henriksen, K., Stambulova, N., and Roessler, K. K. (2010) Holistic approach to athletic talent development environments: A successful sailing milieu. *Psychology of Sport and Exercise*, 11: 212-222. DOI: 10.1016/j. psychsport.2009.10.005

飯尾哲司・藤岡成美・舟橋弘晃・間野 義之 (2023). エリートアスリートはなぜセカンドキャリアで教員を選択したのか : 「プロ野球選手」と「Jリーガー」の事例をもとに. *スポ*

ーツ産業学研究, 33 (1) : 63-73.

Jewett, R., Kerr, G., and Tamminen, K. (2019) University sport retirement and athlete mental health: a narrative analysis. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 11(3): 416–433. DOI: 10.1080/2159676X.2018.1506497

Jodai, K. and Nogawa, H. (2012) A study on professional athlete career transition: An overview of the literature. *Football Science*, 9: 50-61.

北村麻衣・木内敦詞 (2022) 高校卒業後に実業団入りした女子バスケットボール選手のキャリア選択過程：複線径路等至性アプローチによる検討. *体育学研究*, 67 : 775-791.

Kornspan, A. (2014) Career maturity and college student-athletes: A comprehensive review of literature. *Annals of Psychotherapy and Integrative Health*, 17 (3) : 1-14.

Kulcsár, V., Dobrean, A., and Gati, I. (2020) Challenges and difficulties in career decision making: Their causes, and their effects on the process and the decision. *Journal of Vocational Behavior*, 116(Part A): Article103346. DOI: 10.1016/j.jvb.2019.103346.

Lavallee, D., Grove, R., and Gordon, S. (1997) The causes of career termination from sport and their relationship to post-retirement adjustment among elite-amateur athletes in Australia. *Australian Psychologist*, 32(2): 131–135. DOI: 10.1080/00050069708257366

Matsangos, N., Gargalianos, D., Coppola, S., Vastola, R., and Petromilli, A. (2019) Investigation of skills acquired by athletes during their sporting career. *Journal of Human Sport and Exercise*, 15 (3). DOI: 10.14198/jhse.2020.153.02

文 部 科 学 省 (2001) ス ポ ー ツ 振 興 基 本 計 画 .
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014/006.htm, (参照日：2023年10月18日).

文 部 科 学 省 (2012) 第 1 期 ス ポ ー ツ 基 本 計 画 .
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319359_3_1.pdf (参照日：2023年10月18日).

文部科学省（2014）独立行政法人 日本スポーツ振興センター「キャリアデザイン形成支援プログラム」における「スポーツキャリア形成支援体制の整備に関する実践研究」.
https://sportcareer.jp/wp-content/uploads/2021/01/sportcareer_report_jsc_2014.pdf,
（参照日 2023 年 10 月 18 日）.

文部科学省（2017）大学スポーツの振興に関する検討会議 最終とりまとめ ～大学のスポーツの価値の向上に向けて～ .
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf,（参照日 2023 年 10 月 18 日）.

文部科学省（2019）日本スポーツ振興センター事業報告書（2019 年度）（2）（アスリートのキャリアに関する実態調査）. https://www.mext.go.jp/sports/content/20200508-spt_sposeisy-300001067_2.pdf,（参照日 2023 年 10 月 18 日）.

文 部 科 学 省 （ 2022 ） ス ポ ー ツ 基 本 計 画 . https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf,（参照日：2023 年 10 月 18 日）.

Morris, R., Tod, D., and Eubank, M. (2017) From youth team to first team: An investigation into the transition experiences of young professional athletes in soccer. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 15(5): 523–539. DOI: 10.1080/1612197X.2016.1152992

*Murdock, J., Strear, M., Jenkins-Guarnieri, M., and Henderson, A. (2016) Collegiate athletes and career identity. *Sport, Education and Society*, 21(3): 396-410, DOI: 10.1080/13573322.2014.924920

長倉富貴（2016）アスリート学生支援についての一考察. *経営情報学論集*, 22 : 19-41.

並木伸賢・堀野博幸（2022）プロサッカー選手を対象とした研究における心理面に関する文献レビュー. *スポーツ心理学研究*, 49(2): 137-156.

並木伸賢・堀野博幸（2023）大学生アスリートに対するキャリア移行支援に関する文献レビュー：効果的な支援構築の提案に向けて. *スポーツ心理学研究*（早期公開）

- Namiki, N. and Horino, H. (2023) Career transition experiences of Japanese university student-athletes: A qualitative study. *スポーツ科学研究*, 20 : 96-113.
- Navarro, K. and Malvaso, S. (2015) Synthesizing research on the contemporary student-athlete experience: Implications and recommendations for NCAA student-athlete development programming. *Journal of College and Character*, 16(4): 263–269.
- *Nelson, E. (1982) The effects of career counseling on freshman college athletes. *Journal of Sport Psychology*, 4(1): 32-40.
- 日本スポーツ心理学会 (2008) *スポーツ心理学辞典*. 大修館書店.
- Ono, Y., Kaji, M., and Morita, T (2022) A study of the worries that emerge in the career selection of Japanese student athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 22(4): 1009–1017. DOI: 10.7752/jpes.2022.04128
- 尾野裕美・岡田昌毅 (2014) 若年就業者におけるキャリア焦燥感の構造：キャリア焦燥感尺度の開発. *産業・組織心理学研究*, 28(1) : 31-41.
- Oulevey, M., Tsutsui, K., and Kohtake, N. (2018) Quantitative research on Japanese Olympians' causes of career termination depending on the differences between summer/winter and male/female. *Journal of Japan Society of Sports Industry*, 28(4): 295-306.
- *Peng, H. and Johanson, R. E. (2006) Career maturity and state anxiety of Taiwanese college student athletes given cognitive career-oriented group counseling. *Psychological Reports*, 99(3): 805-812. DOI: 10.2466/ PR0.99.3.805-812
- ブティパ・シャンペーン・チャルトラン・デニッシュ・マーフィー：田中ヴェルヴェ京・重野弘三郎訳 (2005) *スポーツ選手のためのキャリアプランニング*. 大修館書店.
- Ramos, J., Subijana, C., Barriopedro, M., and Muniesa, C. (2017) Events of athletic career: A comparison between career paths. *Revista de Psicología del Deporte*, 26(Supplement 4): 115–120.
- Reifsteck, E. and Brooks, D. (2018) A transition program to help student-athletes move on to

lifetime physical activity, *Journal of Sport Psychology in Action*, 9 (1): 21-31, DOI: 10.1080/21520704.2017.1303011

Ryba, T., Stambulova, N., Selänne, H., Aunola, K., and Nurmi, J. (2017) "Sport has always been first for me" but "all my free time is spent doing homework": Dual career styles in late adolescence. *Psychology of Sport and Exercise*, 33: 131-140. DOI: 10.1016/j.psychsport.2017.08.011

戈木クレイグヒル滋子編 (2017) 質的研究法ゼミナール：グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ (第2版). 医学書院.

坂柳恒夫 (2019) 高校生・大学生のキャリア成熟に関する研究－キャリアレディネス尺度短縮版 (CRS-S) の信頼性と妥当性の検討－. *愛知教育大学研究報告*, 68 : 133-146.

Sandstedt, S., Cox, R., Martens, M., Ward, D., Webber, S., and Ivey, S. (2004) Development of the student-athlete career situation inventory (SACSI). *Journal of Career Development*, 31: 79-93. DOI: 10.1007/s10871-004-0566-5

世界保健機関 (1994) Life skills education for children and adolescents in schools: Introduction and guidelines to facilitate the development and implementation of life skills programmes. World Health Organization.

清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. *日本体育大学紀要*, 41 (1) : 111-116.

*Shurts, W. and Shoffner, M. (2004) Providing career counseling for collegiate student-athletes: A learning theory approach. *Journal of Career Development*, 31(2): 95-109. DOI: 10.1177/089484530403100202

Spokane, A. R. and Nguyen, D. (2016) Progress and prospects in the evaluation of career assistance. *Journal of Career Assessment*, 24(1): 3-25. DOI: 10.1177/1069072715579665

Stambulova, N. (1994) Developmental sports career investigations in Russia: A post-perestroika analysis. *The Sport Psychologist*, 8: 221-237.

- Stambulova, N. (2012) Working with athletes in career transitions. In Hanton, S. and Mellalieu, S. (eds.) *Professional practice in sport psychology: A review*. Routledge, pp.165-194.
- Stambulova, N. and Ryba, T. (2014) A critical review of career research and assistance through the cultural lens: Towards cultural praxis of athletes' careers. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 7(1): 1–17. DOI: 10.1080/1750984X.2013.851727
- Stambulova, N. and Wylleman, P. (2019) Psychology of athletes' dual careers: A state-of-the-art critical review of the European discourse. *Psychology of Sport and Exercise*, 42: 74-88. DOI: 10.1016/j.psychsport.2018.11.013
- Stambulova, N., Ryaba, T., and Henriksen, K. (2021) Career development and transitions of athletes: The International Society of Sport Psychology Position Stand Revisited. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 19(4): 524-550, DOI: 10.1080/1612 197X.2020.1737836
- *Stankovich, C., Meeker, D., and Henderson, J. (2001) The positive transitions model for sport retirement. *Journal of College Counseling*, 4(1): 81-84.
- Stumpf, S., Colarelli, S., and Hartman, K. (1983) Development of the career exploration survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, 22: 191- 226.
- Subijana, C., Ramos, J., Harrison, C., and Lupo, C. (2022) Life skills from sport: the former elite athlete's perception. *Sport in Society*, 25 (5): 1051-1064. DOI: 10.1080/17430437.2020.1820991
- Sum, R, Tsai, H., Ching, H., Cheng, C., Wang, F., and Li, M. (2017) Social-ecological determinants of elite student athletes' dual career development in Hong Kong and Taiwan. *SAGE Open*. DOI: 10.1177/2158244017707798
- Tarver, W. (2020) Exploring career maturity: A comparison of student-athletes and non-athletes at a Division I Institution. *Journal of Applied Sport Management*, 12(1). DOI: 10.7290/jasm120101

- Taylor, J. and Ogilvie, B. C. (1994) A conceptual model of adaptation to retirement among athletes. *Journal of Applied Sport Psychology*, 6: 1-20.
- Tokuyama, S. (2015) Attitudes of student athletes toward career transition: Preliminary examination with student athletes in Japan. *International Journal of Sport and Health Science*, 13: 75-83.
- Torregrosa, M., Boixadós, M., Valiente, L., and Cruz, J. (2004) Elite athletes' image of retirement: The way to relocation in sport. *Psychology of Sport and Exercise*, 5(1): 35-43. DOI: 10.1016/S1469-0292(02)00052-3
- Torregrosa, M., Ramis, Y., Pallarés, S., Azócar, F., and Selva, C. (2015) Olympic athletes back to retirement: A qualitative longitudinal study. *Psychology of Sport and Exercise*, 21: 50-56. DOI: 10.1016/j.psychsport.2015.03.003
- 束原文郎・横田匡俊・舟橋弘晃・澤井和彦・長倉富貴・石川勝彦・中村祐介・村島夏美 (2019) 学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景. *スポーツ産業学研究*, 29 (4) : 281-291.
- Turick, R., Bopp, T., and Swim, N. (2021) “How do I do life?” The challenges of preparing student-athletes for professional roles. *Journal for the Study of Sports and Athletes in Education*, 15(1): 71-94. DOI: 10.1080/19357397.2019.1669367
- 上野雄己・小塩真司 (2015) スポーツ選手の競技パフォーマンスに関する基礎的研究: 競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度の作成の試み. *桜美林大学心理学研究*, 6 : 95-105.
- Ulucan, H., Adilogullari İ., and Ünver. D. (2014) Examination of the relationship between occupational burnout and job satisfaction of professional football players. *Journal of Physical Education and Sports Science*, 8 (1), 93-104.
- *Van Raalte, J., Andrews, S., Cornelius, A., Brewer, B., and Petitpas, A. (2017) Student-athlete career self-efficacy: Workshop development and evaluation. *Journal of Clinical Sport*

Psychology, 11(1): 1-13.

Vickers, E. and Morris, R. (2022) Pathway decisions during the student-athlete transition out of university in the United Kingdom. *Journal of Applied Sport Psychology*, 34(4): 803–824. DOI: 10.1080/10413200.2021.1884918

渡辺三枝子 (2018) 新版キャリアの心理学－キャリア支援への発達のアプローチ－(第2版). ナカニシヤ出版, pp1-27.

Whiston, S., Li, Y., Mitts, N., and Wright, L. (2017) Effectiveness of career choice interventions: A metaanalytic replication and extension. *Journal of Vocational Behavior*, 100: 175-184. DOI: 10.1016/j.jvb.2017.03.010

Wylleman, P. and Lavallee, D. (2004) A developmental perspective on transitions faced by athletes. In Weiss, M. (ed.) *Developmental sport and exercise psychology: A lifespan perspective*. Fitness Information Technology, pp.507-527.

Wylleman, P. and Reints, A. (2010) A lifespan perspective on the career of talented and elite athletes: Perspectives on high-intensity sports. *Medicine and Science in Sports*, 20: 88-94.

Wylleman, P., De Knop, P., and Reints, A. (2011) Transitions in competitive sports. In: Holt, N., and Talbot, M. (eds.) *Lifelong engagement in sport and physical activity*. Routledge, pp. 63–76.

Wylleman, P., Rosier, N., and Knop, P. (2016) Career Transitions. In: Schinke, R. et al. (eds.) *International Handbook of Sport Psychology*, Routledge, pp.111–118.

山本浩二・島本好平 (2019) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響. *体育学研究*, 64 : 335–351.

吉田章・佐伯年詩雄・河野一郎・田嶋幸三・菊幸一・大橋仁 (2006) トップアスリートのセカンドキャリア構築に関する検討 (第1報). *筑波大学体育科学系紀要*, 29 : 87-95.

吉田幸司・河野一郎・吉田章・菊幸一・相馬浩隆・三宅守・片上千恵・佐伯年詩雄 (2007) ト

ップアスリーのセカンドキャリア構築に関する検討(第2報):海外先行事例調査を中心
心に. 筑波大学体育科学系紀要, 30:85-95.

謝辞

博士論文の執筆にあたり、多くの方々のご指導・ご支援をいただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

はじめに、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に入学を受け入れてくださり、丁寧にご指導いただいた指導教員の堀野博幸先生に御礼申し上げます。堀野先生には、研究の位置づけやどのような目的で何を明らかにするのかについて常に問いかけていただき、研究者としての基礎を身に着けることができました。また、現場における指導者として振る舞い方や、授業・ゼミでの指導方法についても大変勉強になりました。加えて、研究領域を超えた繋がりもご紹介いただき、私の財産となっております。今後、恩返しができるよう研究者・教育者として精進して参ります。誠にありがとうございました。

副査を快く引き受けてくださった松井泰二先生、佐藤晋太郎先生、コーチング合同ゼミにてお世話になった倉石平先生に感謝申し上げます。先生方には研究を現場にどのように活用するのか、社会実装を見据えたご指導をいただきました。特に、私自身だけでは分からないアスリートの方々の生活や考え方についてご教授いただき、自身の研究についてより深く考えることができました。また、京都産業大学の田村達也先生に御礼申し上げます。田村先生には、プロサッカークラブのスタッフに関連する研究に共同で取り組ませていただくだけでなく、進路についてもご相談させていただきました。共同研究は自分にとって知らない世界ばかりで大変楽しく取り組ませていただきました。また、田村先生を一つの道標として、博士課程の生活を前に進めることが出来ました。

本論文の研究に研究協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。皆様がいなければ本論文が完成することはありませんでした。皆様のことをイメージしながら研究をまとめたつもりですので、少しでも役に立つものになっていれば幸いです。また、本論文は早稲田オープン・イノベーション・エコシステム挑戦的研究プログラムの支援を受けて実施しました。本プログラムでは、研究費の支援だけでなく生活費についてもご支援賜りました。生活への不安な

く研究に取り組めたことは本支援あってのものです。厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、私の家族に心から感謝申し上げます。妻は、私が仕事を退職して全く異なる世界に飛び込むことを受け入れ、子育てと両立しながら研究に取り組む生活の基盤を整えてくれました。日々大変な生活でもありましたが、子どもの成長をしっかりと見守ることができたのは何よりも幸運なことだと感じています。今後も挑戦の多い人生となるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

2024年1月

並木 伸賢

添付資料

添付資料 1

Namiki, N. and Horino, H. (2023) Career transition experiences of Japanese university student-athletes: A qualitative study. スポーツ科学研究, 20 : 96-113. (第 3 章)

添付資料 2

並木伸賢・堀野博幸 (2023) 大学生アスリートのキャリア困難感尺度の作成の試み. スポーツ科学研究, 20 : 141-158. (第 4 章)